

2016年夏におけるアメリカ黒人女性の諸相

—ハリエット・タブマンから「カラー・パープル」まで—

岩本裕子*

要約

2016年度前半の、アメリカ黒人女性をめぐる歴史的諸相を検討する。まず4月に、米20ドル紙幣の図柄が、黒人女性活動家ハリエット・タブマンに決定したことが財務省長官から発表された。多くの女性候補からタブマンが選ばれた意味を考える。続いて6月のトニー賞授賞式では、ルピタ・ニヨンゴが演劇主演女優候補となったアフリカ女性の告発劇“Eclipsed”が注目を集め、“Shuffle Along”の改作では主演オードラ・マクドナルドの演技が好評で、トニー賞作品賞、脚本賞など10部門で候補になった。また最優秀リバイバル賞を受賞した「カラー・パープル」での助演女優ヘザー・ヘッドリーは、「アイダ」以来の熱演を見せた。7月には大統領選挙に向けた民主党全国大会が開催され、混乱した党大会を民主党の重職に就く3人の黒人女性が仕切った。荒れた党大会を鎮めたのはファーストレディ、ミシェル夫人のスピーチで、この4人の黒人女性によって三日間を乗り切ることができたのだった。

キーワード アメリカ黒人女性 民主党大会 ブロードウェイミュージカル

目次

1. はじめに
2. 20ドル紙幣の図柄になる黒人女性
 - 2.1 合衆国紙幣図柄の変遷：女性は描かれたか？
 - 2.2 ハリエット・タブマンという女性の権利追求者
 - 2.3 ハリエット・タブマン決定に至る経緯
3. 2016年民主党大会を動かした4人のアメリカ黒人女性
 - 3.1 フィラデルフィアでの党大会顛末
 - 3.2 党大会を締めくくった3人の黒人女性
 - 3.3 黒人女性ファーストレディによるスピーチのメッセージ
4. 2016年ブロードウェイでの黒人女優の活躍
 - 4.1 アフリカ女性の告発劇“Eclipsed”とルピタ・ニヨンゴ
 - 4.2 “Shuffle Along”とオードラ・マクドナルド
 - 4.3 リバイバル「カラー・パープル」とヘザー・ヘッドリー
5. 二人の友人による学術的貢献
 - 5.1 バーバラ・フィールズ教授とアメリカ南部史学会会長演説
 - 5.2 ジャネット・シムズ・ウッドとドロシー・ポーター・ウェズレイ
6. おわりに

1. はじめに

西暦4桁の末尾2桁が4の倍数年は、オリンピック開催年であると同時に、アメリカ合衆国では大統領選挙の年である。今年2016年は、その年にあたり、リオ・デジャネイロでのオリンピック、パラリンピックは無事に終了し、日本の気運は4年後の東京オリンピックに向かっている。アメリカ大統領選挙も、11月8日^[1]の本選挙まで一月を残して本稿を脱稿する。校了する頃には、最終結果が出ていることだろう^[2]。

2016年度前半に、アメリカ黒人女性には特筆に値することが続いたため、本稿を残すことになった。まず4月20日(水)米財務省長官によって、すでに予告されていた女性を初めて紙幣の図柄にすることが最終決定し、米20ドル紙幣が黒人女性活動家ハリエット・タブマン(Harriet Tubman: 1821-1913)に変更されることが発表された。さらに6月12日(日)ニューヨークでは毎年恒例のトニー賞授賞式が開催され、黒人女優にとっては記録に残る成果となった。筆者は本紀要に2回、トニー賞授賞式関連での黒人女優の活躍を論じてきた^[3]。過去2本の拙稿を踏まえつつ、さらに飛躍的な活躍をした黒人女優の現状分析をしたい。

今年3月以来の大統領候補選定の予備選を経て、二大政党の各党で最終候補を決定する党大会が開催されたのは、7月後半だった。物議を醸す候補者を立てることになった共和党は、7月18～21日にクリーブランド(Cleveland, Ohio)で、最初の女性大統領が誕生するかもしれない民主党は7月25～28日にフィラデルフィア(Philadelphia, Penn.)で、全国党大会を開いた。

民主党大会初日のミシェル夫人(Michele La Vaughn Robinson Obama)による感動的な応援演説は、日本にもいち早く伝わった。これまで拙著2冊で彼女に関する拙稿を書き、メディアのインタビューに答えてきた^[4]筆者は、早速そのスピーチを見聞きし、涙を禁じ得なかった。党大会が予期せぬ事態に至った事実を、*USA Today*は“Black women take over top spots for Democratic Convention”^[5]と伝えた。2016年の民主党大会を取り仕切ったのは、3人の黒人女性だったのである。

2016年夏3月間におけるアメリカ黒人女性の諸相を検討することを本稿の目的とする。時系列ではなく、紙幣図柄変更を導入にして、政治的な展開を確認した後、これまでも筆者が検討し続けてきたブロードウェイ女優たちの足跡をまとめていきたい。紙幣図柄として生き続けるタブマンとは別に、本稿で検討することになる黒人女性たちは、今夏を契機にさらに活躍の場を拡大していくことだろう。

2. 20ドル紙幣の図柄になる黒人女性

2.1 合衆国紙幣図柄の変遷：女性は描かれたか？

合衆国紙幣は、いわゆる米ドル^[6]と呼ばれるもので、1ドル、2ドル、5ドル、10ドル、20ドル、50ドル、100ドルの7種類ある。それぞれ描かれている人物は、1ドルは初代大統領ジョージ・ワシントン、2ドルは第3代大統領トマス・ジェファソン^[7]、5ドルは第16

代大統領アブラハム・リンカン、10ドルは初代財務長官アレクサンダー・ハミルトン、20ドルは第7代大統領アンドリュー・ジャクソン、50ドルは第18代大統領ユリシーズ・グラント、100ドルは建国の父祖の代表だったベンジャミン・フランクリンである。

紙幣以外に硬貨があり、1セント (penny) にはリンカン大統領、5セント (nickel) はジェファソン大統領、10セント (dime) には第32代大統領FDR、25セント (quarter) はワシントン大統領、50セント (half) には第35代大統領JFKの5種類に加えて、1ドル硬貨に関しては記念硬貨となっている。第34代大統領アイゼンハワーの他、2人いる。のべ10人のうち、実質8人の大統領以外、紙幣になりながら大統領ではなかった2人の白人男性がいる^[8]。

アメリカ独立革命の立役者で、「アメリカ最初の近代人」「ヤンキーの父」と讃えられたベンジャミン・フランクリンは、ワシントンが初代大統領に就任した1789年の翌年に亡くなるという長老的存在であった。もう一人のハミルトンは、決闘による死去のため大統領になることはなかった。ただハミルトンに関しては、説明が必要なほど、2016年のアメリカ社会でもはやされ、そのことが紙幣図柄変更にも影響を与えた。第2章第3節で論じる。

さらに記念硬貨の2人の女性に関しては、説明が必要だろう。1ドル硬貨、いわゆる記念硬貨となった2枚を見ておきたい。いずれもアイゼンハワー大統領の記念硬貨より二回りほど小さい大きさである。1枚は1979年製造「アンソニー・コイン」と呼ばれるもの、白人女性で女性参政権運動家として知られるスーザン・B・アンソニー (Susan B. Anthony) が描かれている。1920年に制定された女性参政権を定めた憲法修正第19条は、別名「アンソニー修正条項」とも呼ばれている。この1920年が今回の紙幣図柄変更に大きく関わるが、後述する。

2000年になってもう一枚記念硬貨ができた。やはり女性だが、先住民の女性サカガウィーアである。マイノリティ女性の中から選ばれた彼女は、ジェファソン大統領によって行われた「ルイジアナ購入」の産物である西部一帯を探検したルイス・クラーク探検隊の水先案内人であった。お産直後に、乳飲み子を抱えての出発だったので、硬貨に刻まれたサカガウィーアは赤ん坊を背負っている。ノース・ダコタ、オレゴン、カリフォルニア諸州に建てられているサカガウィーアの立像は、いずれも赤ん坊を背負った姿である。

ニューヨークにあるアメリカ自然史博物館^[9]を舞台にした映画『ナイト・ミュージアム』(*Night at the Museum*) は、人気作品となり続編が2作品も作られた。3作品ともに登場したのが、このサカガウィーアだった。自然史博物館創設に関わり、その入り口には騎馬像が建つ、第26代大統領セオドア・ローズベルトと共に、映画の重要な登場人物とされていた。

以上、現在の合衆国貨幣に描かれた人物像を検討してきたが、1ドル記念硬貨に描かれた、白人女性一人と先住民女性一人以外に、女性が描かれたことはなかった。日本では、2000円札に樋口一葉、イギリスのポンド紙幣やカナダドルにはエリザベス女王、ユーロに変更になる前の仏フランでは、ノーベル賞科学者マリ・キュリーと、すでに女性が描かれた紙幣を目にしてきている。ところが、米ドル紙幣には、女性が登場することはなかった。

前述した、1920年制定の女性参政権を定めた憲法修正第19条から、丁度100年を迎えることになる2020年、つまりアメリカ女性（主として白人女性）が参政権を獲得してから100年目にして、初めて合衆国紙幣に女性が登場すると伝えられたのは、2015年だった。1年間の審議を経て、2016年4月20日に、ハリエット・タブマンという黒人女性が現在の図柄、アンドリュー・ジャクソン大統領に取って代わることが発表された。翌21日付の『朝日新聞』では「米国紙幣に女性の肖像画が使われるのは、1896年まで流通した1ドルの銀兌換（だかん）券に描かれた初代大統領夫人マーサ・ワシントン以来、約120年ぶり」と伝えた。

さらに「現在の20ドル紙幣の表に描かれている第7代大統領のアンドリュー・ジャクソンは裏側に移る。新10ドル紙幣の裏には、19世紀に女性の選挙権のために活動したルクレシア・モットら5人の女性が、5ドル札の裏には人種差別撤廃を訴えたマーチン・ルーサー・キング牧師らが描かれる。新紙幣のデザインは、女性の参政権が憲法で認められて100周年となる2020年に公表される」と報道した^[10]。この経緯は第2章第3節で検討する。

2.2 ハリエット・タブマンという女性の権利追求者

著名人の人気投票が好きなアメリカ人は、折に触れその試みを続けてきた。2008年に、成人あるいは高校生を対象とした人気投票を行った。大統領とファーストレディを対象外として、アメリカ史における著名人は誰か？と問いかけたとき、上位10人のうち成人では9位、高校生では何と3位に位置づけたのは、黒人女性のハリエット・タブマンだった^[11]。

米ドルに初めて登場する女性に選ばれたハリエット・タブマンとは、どのような黒人女性だったのだろうか。筆者はこれまで何か所にも彼女に関する紹介文を書いてきた^[12]。ここでは、最新拙著『物語 アメリカ黒人女性史（1619-2013）：絶望から希望へ』の元原稿から一部引用、加筆修正して、タブマンのことを紹介する。

タブマンが生まれたメリーランド州ドチェスター郡は、州内でも北部寄りでペンシルヴァニア州まで約200キロの位置にあった。子どもの頃主人に殴られたために額に傷を持ち、その傷を隠すため常に頭にターバンを巻くようになった。後世のタブマンの写真や絵は、ターバンで頭の傷を隠したものが多い。

若い頃から何度も逃亡を試みたが、失敗の連続だった。結婚後、夫ジョンを残して28歳のときにやっと、念願の逃亡に成功して自由黒人となった。1849年頃とされている。一人の逃亡だったが、「地下鉄道」の駅、すなわち組織の一員である白人家庭を次々と乗り継ぎながら昼間を過ごさせてもらい、食料をもらっては、夜の道を北へ向かって逃げた。2週間目にやっとペンシルヴァニア州の土を踏んだときの感動をこう残している。「私は両手を握りしめ、じっと見つめた。奴隷だった自分と今の自分は同じなのだろうか。すばらしい！まるで天国にいるようだ」と。

この後タブマンは自分の逃亡だけで満足せず、他の奴隷たちの逃亡を助けるのだった。自身の弟や両親を始め、多くの仲間を逃亡させたタブマンは、誰よりも夫ジョンを連れ出したかった。ところが農園に潜入してみると、夫はすでに他の奴隷女性と一緒に暮らし始めてい

た。その光景を小屋の陰から見つけたタブマンは、絶望に打ちひしがれるのだが、悲しみにひたる余裕はなかった。他の奴隷を救い出すという使命を果たす以前に、彼女自身の身の危険が迫っていた。気を取り直し、タブマンは本来の仕事に戻るのだった。

こうして彼女は「車掌」の役目から始めて、輸送隊の「女性総司令官」と言えるまでに成長していった。勇気に満ちた長い逃亡の旅を指揮する上で、失敗がないことをタブマンは誇りとしていた。「男のように強く、ライオンのように勇敢で、狐のように賢い」と形容されたタブマンは、危険な南部へ合計で19回も潜行し、300人もの黒人奴隷を直接連れだした。

白人農園主にとって貴重な財産である奴隷を失うことは、経済的な損失のために、奴隷所有者たちは逃亡奴隷を連れ戻すことに賞金をかけるようになった。相場は100ドルくらいだったが、逃亡援助者タブマンの首には破格の4万ドルもの賞金が懸けられた。白人の間で恐れられたタブマンは、黒人たちからは救世主として慕われた。出エジプトを成功させた、偉大なるユダヤ人の指導者モーセの名にちなんで「黒人の女モーセ」と呼ばれた。

南北戦争以前の最後の逃亡は1860年末に行われた。時代は大きく揺れ始め、翌年4月には南北戦争が勃発した。186,000人を越える黒人の仲間たちを奴隷状態から解放することこそを、目標としたタブマンは、戦争勃発と同時に活動を開始した。彼女は偵察員、情報提供者、看護師として連邦軍に参加した。戦争中の彼女の武勇伝としてコンバヒー川での出来事がある。南部サウス・カロライナ州へ進軍した連邦軍のスパイの役目をしたタブマンは、奴隷解放宣言後の1863年6月には、奇襲隊を指揮して同州のコンバヒー川まで進軍し、同州の750人もの奴隷を解放したのだった。

1978年に黒人遺産記念切手シリーズ発行が決まったとき、最初に描かれたのは誰でもない、ハリエット・タブマンだった。後世での評価以前に、同時代の黒人男性たちからの賛辞をあげておこう。まず同時代の黒人男性指導者フレデリック・ダグラスからの言葉である。ダグラスとは出生時期、出生地、活動内容など類似点が多い。だが歴史の表舞台に登場するのは、タブマンよりダグラスのほうだった。戦後の1868年にダグラス自身がタブマンの人生を次のように讃えている。

「私たちふたりの相違点ははっきりしている。私が公の場で日の光を浴びながら、多くの人の賞賛を受けて活動してきたことと比べて、あなたは人知れず、夜の暗闇で仕事を続けてきた。神のご加護だけを信じて、深夜の空と静かな星々だけに見守られながら自由のために献身してきたのだ」と。

もうひとつの賛辞は、19世紀末の南部黒人に自助を説いた教育者ブッカー・T・ワシントンからであった。ワシントンはタブマンのことを「兩人種間に融合をもたらし、白人が黒人のことを高く評価するきっかけを作った」存在だと評価した。

1869年にタブマンは、友人のサラ・ブラッドフォードに伝記を書いてもらい、その売上金をわずかに受け取った。また南北戦争中に軍事的奉仕をしたことで、年金受給権を主張して約30年間訴え続け、結局月20ドルの恩給を受け取ることになり、これらを資金としてニューヨーク州に家を購入した。仕事も得られず身寄りもない高齢化した元黒人奴隷たちや、解放

黒人や黒人兵の遺族たちの住居として提供した。戦後のタブマンの仕事はこうした社会改革であった。タブマンは87才と長生きしたために奴隷解放はもちろん、女性の権利獲得の歴史を見守り続けることができた。

2.3 ハリエット・タブマン決定に至る経緯

2016年4月20日水曜日、合衆国財務省長官、ジェイコブ・ルー (Jacob J. Lew) は、20ドル紙幣の図柄を、アンドリュー・ジャクソン大統領からハリエット・タブマンに変更すると発表した。この会見で、タブマンのことを「元奴隷で奴隷制反対論者、女性の権利や公民権運動の指導者」と説明した。

ルー氏は、昨年時点では20ドルではなく10ドル紙幣の図柄を、アレクサンダー・ハミルトンから女性 (a woman) に変更すると予告していた。ところが、この1年でブロードウェイ・ミュージカル「ハミルトン」が演劇界を席卷し、この長官発表の2ヶ月後のトニー賞授賞式では「ハミルトン」が圧勝することになった。こうした時流を考慮して、合衆国の初代財務省長官アレクサンダー・ハミルトンは、紙幣の図柄上命拾いしたのだった。翌日の『ニューヨーク・タイムズ』の見出しは「20ドル紙幣：タブマンに決まり (In)、ジャクソンは消滅 (Out)」だった^[13]。

今回の紙幣図柄決定に至る経緯を検討する前に、ハリエット・タブマン研究の最前線を確認しておきたい。前節の導入で引用した人気投票を伝えたのは、Lois E. Horton, *Harriet Tubman and the Fight for Freedom: A Brief History with Documents*, The Bedford Series in History and Culture, 2013, Boston, MA. だった。この研究書は、シオンバーグセンター蔵書では最新のもので、閲覧室で確認できた。研究書前半 (Part One) は、タブマンの人生やその時代の説明がなされ、後半 (Part Two) は、史料集 (Documents) になっている^[14]。

財務省発表翌日の *The Christian Science Monitor* 掲載記事は「\$20紙幣にハリエット・タブマン：アメリカにとっての意味」と題し、二人のタブマン研究者へのインタビューを伝えている^[15]。キャサリン・クリントン (Catherine Clinton) テキサス大学教授は「タブマンは、自由のための闘いを続けることによって、奴隷の自由など当たり前ではなかった時代に、自由獲得が可能だと示した」と、その功績を讃えた。ちなみにクリントン教授はタブマンの伝記 *Harriet Tubman: The Road to Freedom* (2005) の著者である。

もう一人のタブマン研究者、ジーン・ハメス (Jean Humez) ボストン大学名誉教授は「自由の象徴としてタブマンが選ばれたのだろう」と発言し「1849年に [逃亡して] 北部で自由を獲得して以来、彼女は常に神話的存在とされてきた。白人からの人種差別、男性からの性差別と闘う存在として、奴隷制反対運動家たちや、19世紀半ばの女性参政権運動家や教育者などの活動家たちから神話的な存在として評価された」と歴史的評価を説明した。ハメス教授による伝記 *Harriet Tubman: The Life and the Life Stories* (2003) は研究書としても高い評価を得ている。

さらに記事は「21世紀に入っすぐ、タブマンの伝記が3冊出版され、過去60年間で最初の女性を対象とした伝記で、南北戦争の解釈そのものを変えてきたと言える」と伝えている。研究書ならずとも、タブマンを紹介する児童書出版は、枚挙にいとまがない。ここでそれらの例を挙げる必要はないだろう。筆者が最初にタブマンに出会ったのは、黒人偉人紹介本だった。1人1頁程度の紹介本で、その大半が黒人男性偉人であったが、数少ない黒人女性の中にタブマンは登場した。子どものための紹介本も、多数出版されているが、タブマンを紹介しない本は1冊もない。アメリカの子どもたちがタブマンに出会う最初の空間は、こうした偉人紹介本であろう^[16]。そのことが、前述した成人では9位なのに、高校生で3位だったことの理由だと思われる。

ルー長官が2015年に「女性に変更」と発表したことによって、NPO法人 Women On 20s が、女性の図柄変更に向けてネット投票を行った。50万票の投票の結果、100人以上の女性候補があがった。その最終候補には、タブマン以外に、ローザ・パークス (Rosa Parks)、エリノア・ローズヴェルト (Eleanor Roosevelt)、元チェロキーネーション族長 (1985-95在位) のウィルマ・マンキラー (Wilma Mankiller) などがあがったという^[17]。

結果的にタブマンに決定したが、ここまでに至る経緯について、シオンバーグセンターでの検索で膨大な史料を入手できた。それらすべての史料を詳細に検討するには紙幅が足りず、簡潔にまとめることになる。タブマンに限らず、本稿で対象とする黒人女性に関する入手史料は、その一部になるが巻末に一覧として付記する。

紙幣図柄変更が話題になる以前からハリエット・タブマンの偉業を讃えるための試み、あるいは発言は続いてきた。その一部に言及しておこう。まずニューヨークのハーレムにある彼女の立像については、すでに拙著に写真で紹介した^[18]。彼女が生まれたメリーランド州東海岸 (the Chesapeake Bay's Eastern Shore) では、彼女の記念館 (a Tubman visitor center) 設立の動きが地元出身の国会議員などによって進み、没後100年の2013年に完成した。晩年までの54年間を過ごしたニューヨーク州オーバーン (Auburn, N.Y.) でも同様の企画が検討された。

この2年後、南北戦争終結150周年で2015年公開予定だった「国立アフリカ系アメリカ人歴史と文化博物館」(The Smithsonian's National Museum of African American History and Culture; 1年遅れで2016年9月公開) に、タブマンに関する貴重な史料が「タブマン・コレクション」として寄贈されることが、2010年3月には報道された。さらに、翌年2011年4月の記事によれば、タブマンの像を国会議事堂内の展示 (議事堂内には合衆国に貢献した人々の立像が並べられている。ほとんどが白人男性の著名人である) に加える運動が続けていることが伝えられ、2016年3月に展示決定が伝えられた^[19]。

2016年9月末、大統領選挙の候補者二人によるテレビ討論が始まっている。その候補者の一人ヒラリー・クリントン (Hillary Rodham Clinton) は、彼女自身が民主党候補者に選ばれることのなかった8年前の2008年党大会において、次のような発言をした。「犬が吠えるのを聞けば、進み続けよ。森に松明が見えたら、進み続けよ。あなたの後で誰かが叫んで

いるのなら、進み続けよ。決して止まってはいけない。進み続けよ。もしあなたが自由を味わいたいのなら、進み続けよ」と。民主党には前進あるのみ、というメッセージを「奴隷制反対論者ハリエット・タブマン」の言葉に託したことになっている。ただこの発言後、この言葉自体がタブマンの言葉かどうかの真偽を『ニューヨーク・タイムズ』が問題にした。タブマン研究者などへのインタビューを伝えながら、この表現がタブマン自身の発言かどうかは疑わしい、と言う結論に達している^[20]。

ハリエット・タブマンをめぐるこうした試みや議論は、没後100年を超える現在においても、いかにタブマンが大きな存在であるかを示している。彼女が自由を求め、そのために闘い続けたことは、現代社会においても大きく評価に値することは明白である。註17に列挙した12人の女性候補を超えて4人に絞られたアメリカ女性の中から、ハリエット・タブマンが最終的に残ったことは、アメリカ社会がいかに「自由」への意識が高いかの表れだろう。女性参政権獲得100周年にあたる2020年には20ドル紙幣に、“Indian hater”と揶揄されたジャクソン大統領に代わって、自由を希求し続けたタブマンの顔が登場する。アメリカ社会に投じる一石となることに期待する。

3. 2016年民主党大会を動かした4人のアメリカ黒人女性

3.1 フィラデルフィアでの党大会顛末

2016年大統領選挙は、本選挙まで2ヶ月となった現執筆時点で、二大政党の両候補はいずれも「不人気」とか「嫌われ者」と評され、前向きな盛り上がりには欠ける。暴言を吐く共和党候補よりでしたが、「嘘つき」呼ばわりされる民主党ヒラリー候補を指名するための民主党全国大会は、7月25～28日にフィラデルフィアで開催された。

「はじめに」で説明したが、予期せぬ事態を *USA Today* は“Black women take over top spots for Democratic Convention”^[21]と伝えた。党大会を取り仕切ったのは、3人の黒人女性だった。「歴史的」とも評されたこの事態の顛末を、まとめておきたい。

週明け25日からフィラデルフィアで始まった民主党大会は、波乱の幕開けとなった。まず先週、民主党幹部が送ったサンダース (Bernie Sanders) 妨害を謀るメールが流出される事件後、民主党全国委員の副委員長ドナ・ブラジル (Donna Brazile) が、サンダース陣営を訪問して陳謝し、24日のテレビ番組で「(民主党全国委員による不正) 疑惑、メール、無神経さ、愚かさに対応する必要がある」と語った。

サンダース支持者に配慮して、デビー・ワッサマン・シュルツ (Debbie Wasserman Schltz) 委員長は党大会では演説を行わず、党大会終了翌日の7月29日に予定している民主党全国大会会議で、ブラジル副委員長を正委員長に昇進させ、大会中はブラジルが暫定委員長に就任することを決めた^[22]。大会当日に民主党全国委員長のシュルツが辞任し、ドナ・ブラジルが暫定委員長に就任したのだった。ブラジルはCNNやABCでコメンテーターをしていたが、その契約を一時的に停止した。

これで党大会運営のトップ3は、ドナ・ブラジル、マーシャ・ファッジ (Marcia Fudge)、

リア・ドートリー（Leah D. Daughtry）という3人の黒人女性になった。ファッジは、オハイオ州ウォレンズビルハイツ（Warrensville Heights, Ohio）で、黒人としてまた女性として初めての市長になった歴史的な政治家で、現在は連邦下院議員で、下院黒人議員会議の議長でもある。「この点だけでも、実は今回の大会は歴史的だ」^[23]と日本のメディアでは伝えた。

党大会議長であるファッジが、開始の木槌を打つ儀式で壇上に立つと、サンダース支持の代議員から激しい野次が起こった。言葉をかき消されたファッジが「この会場の多くの人が私のことを知らないことはわかっています。私は公平である（fair）ようにするし、ここに集まった人の多様な意見を聴きたいと思っています。私はあなたたちに敬意を払うから、あなたたちも私に敬意を払って下さい」と厳しくたしなめた。この騒ぎでファッジは木槌を打ち忘れてステージを離れ、後で別のスタッフが現れて打ったのだった^[24]。

党大会が荒れることは、開催前にサンダースが別の会場で支持者に行ったスピーチのときからわかっていた。彼がヒラリー支援を呼びかけた途端、会場にプーイングの嵐が起こり、サンダースはしばらく言葉を失って会場を見渡したのだった^[25]。民主党が、予備選で敗北したサンダースの政策の多く（最低賃金15ドル、警官による銃撃事件に関する刑事司法強化、マリファナの合法化、ウォール街改革、死刑廃止、炭素税）を政策綱領に加えたことは注目に値する。だが多くのサンダース支持者は、そう簡単に怒りを鎮められなかった。その怒りを鎮めるためには、ある女性の登場を待つしかなかった。

3.2 党大会を締めくくった3人の黒人女性

その女性の登場に触れる前に、「歴史的」とも評された重要な役割を果たした3人の黒人女性について、彼女たちの経歴を検討する。

開始の木槌を打つはずだった大会議長マーシャ・ファッジについて、もう少し説明を加えよう。現在はオハイオ州選出の連邦下院議員（2008-）だが、2000年に黒人で女性初のウォレンズビルハイツ市長に当選して以来8年間、地方行政にあたった。この町はクリーブランド郊外地で、黒人中産階級が多く居住している。クリーブランド生まれで、オハイオ州のために尽力してきた政治家だったので、ファッジの言葉通り、党大会参加者が彼女のことを知らないことも納得できる。連邦下院議員となって以降、サンダース陣営が主張している最低賃金15ドルについてはすでに陳述し、幼児期、初等・中等教育に関する小委員会の委員に任命され、政治運営にあたっている^[26]。

今回の民主党全国大会議長というトップ3の大役を果たしたこと、党大会参加者たちに「私に敬意を払ってほしい」と訴えたことで、全米的に名前を知られ、彼女の政治家としての仕事の幅が広がる可能性は高くなっただろう。

ファッジ以上に無名だったのは、リア・ドートリーかもしれない。2015年4月に、民主党全国大会委員会の最高経営責任者（CEO: Chief Executive Officer）に指名された。2008年の党大会でもCEOを立派に務めたことで再度指名されたのだった。指名を受けて「民主党

大会を率いていくことに興奮している。過去6年間同様に、第45代大統領を民主党から出せるように、ホワイトハウスへの道を、ここフィラデルフィアから始めたい」と決意を語った。党大会初日のCEO挨拶では、「民主主義発祥の地、ここフィラデルフィアに集い、アメリカ的価値である“*We The People*”を祝いたい。これは“*ALL The People*”を意味し、民主党が誇るすべての人々のためのアメリカン・ドリーム実現をめざしたい。全ての人に開放された (inclusive) 党大会となるだろう」と述べた。政治的理想だけでなく、CEOらしく経済的効果も十分理解していた。2015年のフランシス教皇 (Pope Francis) 訪問時のように、フィラデルフィアの街に多くの経済的利益をもたらすだろうとも、開催前に語った^[27]。

ドートリーには Reverend (牧師) の肩書きがつく。ニューヨーク市ブルックリン区の牧師の家庭に生まれ、育った。彼女自身も現在、自ら所属する小さなペンテコステ教会で非常勤の牧師を務めているので、この肩書きがつく^[28]。政治的集会においても、しばしば牧師の役目を果たし、地域に根ざした活動をしている。党大会初日付け出版の女性雑誌 *ELLE* に、大変興味深いインタビューが掲載された^[29]。黒人女性の視点からの質問で、黒人史をたどるような質問が続いた。ドートリーの選挙区出身の黒人女性政治家シャーリー・チゾム (Shirley Chisholm) を大変誇りに思っているようだった。チゾムは1960年代半ばから州議会議員を経て、1968年に黒人女性初の連邦下院議員に当選した。ニクソン再選をかけた1972年大統領選挙では出馬も試みたのだった^[30]。

インタビューは、1988年の大統領選挙に出馬したジェシー・ジャクソン (Jesse Jackson) の話にも広がった。民主党大会関連でさらに歴史をたどって、ジョンソン再選をかけた1964年の大統領選挙では、黒人代議員を送り込むためのミシシッピ自由民主党 (MFDP) を結成させたファニー・ルー・ヘイマー (Fannie Lou Hamer)^[31] 関連の質問を受けて、「議席がないとは言え、(ヘイマー同様に) 党大会CEOとして全力を尽くすことがすべてです」と、ヘイマーの偉業を讃えた。このインタビューの回答通りドートリーは役目を立派に果たし、本選挙で再度民主党から第45代目の大統領を出すことを念じていることだろう。

3人目の黒人女性ドナ・ブラジルに戻ろう。今夏の史料収集^[32] では、ブラジルがもっとも史料数が多く15ファイルを入手した。二次史料ではなく、自身の著作があるのは彼女だけだった。*Cooking with Grease: Stirring the Pots in American Politics* と題される、巻末には南部料理のレシピも付く^[33]。ドナ・ブラジルが暫定委員長に就任したことで、CNNやABCで引き受けていたコメンテーター契約を一時的に停止したことは、すでに紹介した。コメンテーターとしてのブラジルの評価は、友人との会話^[34] によれば、大変公平な立場での発言をするので信頼できるとのことだった。ブラジルの著作に関しても、すでに読んでいるようで、「南部料理には動物の油脂 (grease) をよく使うのよ」と嬉しそうに笑った。この友人は、あとの二人についてはほとんど知らない様子だった。

南部料理のレシピを著書巻末に付けるブラジルは、1959年にニューオーリンズで生まれ、ルイジアナ州ケネルで育った。人名辞典の肩書きは政治コンサルタントとなっている。1980年代初めにロビイストとして活躍し、1983年にはワシントン大行進20周年の企画監督をし、

翌年の大統領選挙に出馬したジェシー・ジャクソン牧師の応援をした。

ブラジルが初めて経験した大統領選挙は、1976年のジミー・カーター大統領誕生時だった。選挙権年齢に達していなかったこのときから、民主党でボランティアとして活動した。民主党大会で重要な役目を果たし続け、2000年の大統領選挙ではアル・ゴア大統領候補によって、選挙対策委員長に指名された。物議を醸した選挙の結果、ゴアは当選することはできなかったが、ブラジルの力は認められ、今回は民主党全国委員の副委員長を務めた結果、暫定的委員長として党大会を仕切ることになったのだった^[35]。

3.3 黒人女性ファーストレディによるスピーチのメッセージ^[36]

民主党大会初日のテーマは「United Together（一体になり結束する）」だった。大荒れの幕開けとなり、サンダース支持者たちのスピーチまで野次で妨害された。そんな大荒れの雰囲気をも鎮めたのが、ミシェル・オバマだった。彼女がヒラリー支援を宣言したときに、サンダース支持者からはブーイングや「バーニー！ バーニー！」というシュプレヒコールが起こったが、ミシェルは「8年前に〔予備選に敗れたヒラリーが〕指名を得ることができなかったとき、彼女は怒ったり、幻滅したりはしなかった」と間接的にたしなめた。アメリカのポジティブな面に焦点を絞ったミシエルのスピーチは、怒りや憎しみをかきたてるトランプとは対称的だった^[37]。

「私の夫バラクのために、この場で初めてスピーチをしてから8年も経ったなんて信じられない」という言葉で始まったスピーチは、ホワイトハウスで過ごした8年間を述懐するようなエピソードから始まった。8年前、2008年の民主党大会でどのようなスピーチをしたかについて、不愉快な事実と共に、全米の人たちがミシエルの知力に溢れたスピーチを思い出すことになった。

一足先に開催された共和党大会での、トランプ候補夫人（Melania Trump）によるスピーチが問題になった。2008年のミシエルのスピーチの捏造だったのである。党大会時点で筆者は日本にいたので、アメリカでの過熱報道ぶりを目撃することはできなかったが、日本の報道では、トランプ夫人のスピーチと同時に8年前のミシエルを映し出していた。この映像を見て、8年経ってもミシエルの立ち位置は揺るがないことが確認できたと同時に、似た内容のスピーチをしたとしても、トランプ夫人による語りかけでは、違和感は覚えても感動はないことを実感した。

8年後の今回のスピーチで、事実確認（fact checking）が話題になった部分がある。すでに言及した2008年のヒラリーによるタブマン言説でもメディアでの検討に触れたが、アメリカメディアでは、この事実確認は常に話題になる。直近では第1回大統領選挙テレビ討論でも、トランプの発言の数々が事実誤認であるとき、ヒラリーから「事実確認に委ねたい」との発言がなされていた。

その事実確認を必要としたミシエルの発言は以下である。「私は、奴隷が建てた家〔ホワイトハウス〕で、毎朝目覚めます。私の娘たち、賢くて美しい2人の若い黒人女性が、ホワ

イトハウスの芝生で犬と戯れるのを眺めます。ヒラリー・クリントンのおかげで、私たち全員の子や娘たちは、女性が大統領になるのを当たり前だと思えるようになるのです」

ホワイトハウス建設に従事したのは奴隷なのかどうか、これが事実確認の対象となった。現在、アメリカ合衆国の首都はワシントンD.C. (Washington District of Columbia) だが、初代大統領就任の1789年時点ではニューヨーク市だった。新首都建設を前提としてそれまでの暫定首都として、1790年から10年間はフィラデルフィア (Philadelphia, Pa.) に遷都した。ヴァージニア州とメリーランド州が土地を提供し、州境のポトマック川を一部埋め立てて新しい都市を建設したのだった。東京の山手線内部に相当する面積だった。首都建設基本計画案作成者である建築家は、独立戦争に従軍するためにラファイエット少将に付いて、北米植民地へ渡ったフランス人のランファン (Pierre Charles L'Enfant) だった。1800年に完成したが、この年の大統領選挙で再選を叶えられず長く住むことができないことを前提に、ジョンとアビゲールのアダムス夫妻によって、同年11月にホワイトハウスへの引っ越しがなされた^[38]。

このホワイトハウス建設に従事したのは、果たして奴隷たちだったのかどうかの事実確認結果は以下である。史料としたのは、全国紙『ニューヨーク・タイムズ』『ワシントン・ポスト』及び『タンパベイ・タイムズ』(Tampa Bay Times) である^[39]。ホワイトハウス歴史協会 (The White House Historical Association) HPに依拠すると、ホワイトハウスを含む首都の建築物の建設には、メリーランド州とヴァージニア州の白人労働者に加えて、アイルランドやスコットランドからの移民を想定していたようだが、結果的に周辺にいたアフリカ系アメリカ人、つまり黒人 (奴隷及び自由人) も関わったと説明している。

『見えない人々：ホワイトハウスの黒人奴隷に関する知られざる物語』(The Invisibles: The Untold Story of African American Slaves in the White House, 2016) の著者でジャーナリストのジェシー・ホランド (Jesse Holland) 氏へのインタビューによれば、ホワイトハウス建設に黒人奴隷が従事したことは自明だという。2008年出版の彼の著作ですでに言及済みだった。首都に設定された州が、南部のヴァージニア州は当然ながら、北部のメリーランド州も奴隷州であったこと (南北戦争では奴隷州ながら首都側の北軍に留まった。仮に南軍になったとすると、開戦時点で首都は南軍に囲まれることになった) を考えると、両州にいた奴隷が労働力になったことは容易に想像できる。

事実確認ができ、ミシェルのスピーチは物議を醸す必要がなくなった。世界の子どもたちのために政治家を続けてきたヒラリー候補が大統領になることによって、アメリカだけでなく世界中の子どもが安心して社会へ出られるように、彼らに勇気を与え、希望であり続けてもらうためにはヒラリー候補が大統領になってもらわなければならないことを力説した。「成り行きに任せて傍観してはいけい。疲れたりストレスをためたり、厭世的になったりする暇はない。大統領選挙がある11月まで、8年前と4年前に私たちが実行したと同じことをしていこう」と民主党の United Together を確認してミシェルのスピーチは閉じられた。

彼女のスピーチは、会場全体で受け入れられたことは当然だったが、その後にメディアでも好意的に受け止められた。全米メディアはもちろんのこと、海外メディアでも高い評価を得た。『ロンドン・イーヴニング・スタンダード』（*London Evening Standard*）では、「アメリカはミシェル・オバマを惜しむだろう」と見出しして、2期8年務めたファーストレディの存在が合衆国民にはかけがえのない存在だったことを再確認していた。2009年に就任以来、年を重ねるごとに下降気味となっていたオバマ大統領の人気に比べて、ミシエルの人気は常に60%を超えてきた。ミシエルの政治家としての登場に期待する報道は続いている。拙著での結語は実るのかどうか、今後を注視し続けたい^[40]。

4. 2016年ブロードウェイでの黒人女優の活躍

4.1 アフリカ女性の告発劇“Eclipsed”とルピタ・ニヨンゴ

2016年6月12日、マンハッタンのビーコン劇場では、第70回トニー賞授賞式が行われた。直前にオーランド（Orlando, Florida）で起こったテロ行為に関して、司会者から被害者に献辞を捧げることで式は始まった。今回のトニー賞では黒人女優の活躍が大きく評価され、その結果を残すことができた。その「黒人」と言う場合、アメリカ黒人女優に限定しない、人種的な「黒人」を意味することになる。

ルピタ・ニヨンゴ（Lupita Nyong'o）は、ケニア人の両親の元1983年にメキシコで生まれた。父親はケニアの政治的指導者で、政治的不安定を理由にメキシコへ移っていたが、ルピタが子どもの頃にケニアに戻り、祖国で育った。大学教育は、アメリカ合衆国（イエール大学演劇学部）で受けて、映画や演劇を学んだ。子どもの頃に見た映画「カラー・パープル」のウーピー・ゴールドバーグとオプラ・ウインフレイの演技に強く影響を受けたと語っている^[41]。

ルピタの人生は、映画「それでも夜は明ける」（12 Years a Slave：2013）の助演女優パッシー役のオーディションを受けたことから大きく変わり始めた。共演俳優から「若い奴隷だが、人間としてすごく特別なエネルギーを放つ。一種の優雅さを持って働く。物腰やプライドや仕事ぶりに荘厳な雰囲気があり、エネルギーに満ち溢れている。ルピタはこの役にぴったりだ^[42]」と評価されたパッシー役で、アカデミー最優秀助演女優賞を受賞し、ケニア人としてはばかりかメキシコ人としても最初のアカデミー賞女優となったのだった。

デビュー作で一躍有名になったルピタだが、すでに2009年に監督・編集・制作に携わった長編ドキュメンタリーを世に問うていた。アフリカ諸国で多くの患者が危険な状態に置かれている先天性色素欠乏症（albino）のケニア人8人を追ったドキュメンタリー“In My Genes”だった。この仕事が契機で、イエール大学への進学を決めたとのことである^[43]。家庭環境などから意識高く育てられたルピタが、2015年にブロードウェイ演劇“Eclipsed”を出演作に選んだことは納得できる。

“Eclipsed”の脚本家は、ダナイ・グリラ（Danai Gurira）というジンバブエ系アメリカ人である。南ローデシア〔当時〕からアメリカ合衆国へ移民した両親の元、1978年にアイ

オワ州で生まれたダナイは、5歳のときに家族と共にジンバブエと改名し正式に独立した祖国へ帰った。その後大学教育を受けるために、合衆国に戻り現在に至っている。脚本家だけでなく、女優も続けていて、テレビのホラー番組“The Walking Dead”の Michone 役で人気が出て、2016年度NAACPドラマシリーズの俳優イメージ賞候補にも選ばれた^[44]。

劇“Eclipsed”は、俳優もスタッフもすべて黒人で、女性の想像力に満ちたチームで作られ、オフ・ブロードウェイで始まり、その圧倒的な人気のお陰でブロードウェイへ進出できた。2016年度トニー賞では、ダナイの脚本とルピタの主演女優を含む5部門の候補に選ばれ、衣装部門が最優秀賞を受賞した。

リベリアでの第二次内戦中の混沌とした状態が舞台で、内戦兵士とその誘拐された妻たちの話である。3人の妻たちにはそれぞれ名前がありながら、兵士からは番号で呼ばれて、性的虐待を受け続けていた。そこへ4人目の妻が連れてこられる。誘拐された少女で、名前は知らされずNo. 4と呼ばれる。『ニューヨーク・タイムズ』の評者はここで「ナイジェリアで過激派イスラムグループ、ボコハラムによって何百人もの高校生が誘拐されたことを我々は忘れてはならない」と加筆している。このNo. 4の役を演じたのが、ルピタ・ニヨンゴだった。「今シーズンのブロードウェイ演劇で、もっとも光を放ち、人間性を否定されるような役柄を演じながらも、その苦しみを超えて余りある思いやりと共に輝いていた女優」と評価されていた^[45]。

ルピタは、オスカー女優となった後には、『スター・ウォーズ／フォースの覚醒』(Star Wars: The Force Awakens)で、CGI再現によるしわだらけの酒屋の女主人「マズ・カナタ」(Maz Kanata)役を演じたり、マーベルコミック初の黒人ヒーロー「ブラック・パンサー」^[46]のスピノフ映画で、ヒロイン役で出演予定とか、話題作への出演が続く^[47]。これからの活躍は保証されているようだが、彼女の映画人としての意識の高さは、ドキュメンタリー“In My Genes”を制作したり、“Eclipsed”に出演したりしたように、アフリカという出自から離れることなく、成長し続けることだろう。

ダナイ・グリラもルピタも、ジンバブエやケニアといったアフリカ人であることに誇りを持ち、同時に「奴隷の子孫」というアメリカ黒人ではなく、アフリカ系アメリカ人としての意識も持ちながら自らの才能を伸ばし続けることだろう。

4.2 “Shuffle Along”とオードラ・マクドナルド

オードラ・マクドナルド (Audra McDonald) に関して、2014年時点で十分な議論を展開^[48]できたと思うが、この2年間で、オードラ自身に公私ともに変化があったようで、そのことを検討することで本節の役目を果たしたい。2016年トニー賞授賞式において、オードラは大変重要な役目を果たし、随所に登場した。2年ぶりのオードラは少し太ったように見えた^[49]が、その歌唱力は全く衰えることなく、ダンスも軽やかに披露していた。

“Shuffle Along”は1921年に初演され、ミュージカルにレビュー (revue) 形式を取り入れた舞台で、初演時には504公演続き、当時では異例のロングランとなった。レビューと

は、踊りと歌とを中心にコントを組み合わせ、多彩な演出と豪華な装置を伴うショーである。元々パリで、毎年12月に1年間の出来事を風刺的に演じた一種の喜劇として始まり、第一次世界大戦後に各国で流行した演劇だった^[50]。

黒人演劇界でこの“Shuffle Along”は、金字塔のような存在だった。ボードヴィル (vaudeville) と呼ばれる歌曲、舞踏、軽業、寸劇などを組み合わせた大衆的娯楽演芸の4人の黒人ベテランによって書かれたもので、彼らが最初に出会ったのは、フィラデルフィアで開催された全国黒人地位向上協会 (NAACP) 主催の慈善興行だった。一度もミュージカルを書いたこともなく、当然ブロードウェイに進出したこともなかった4人による“Shuffle Along”は、ブロードウェイの観客の心をつかんで離さなかった^[51]。

ジャズ音楽を取り入れ、16人の少女たちのコーラス・ライン (ミュージカルの主役とコーラスを区別する線) など斬新な試み満載であった。主役には当時の黒人スターたちが登場した。ジョゼフィン・ベイカー (Josephine Baker)^[52] やハリウッドで活躍する俳優ポール・ロブソン (Paul Robeson) が舞台に立ったことも観客を呼ぶ一因だったのである。

1921年の初演以降、1933年と1952年の2回ブロードウェイでリバイバル公演されたが、今回2016年の公演は“Shuffle Along, or, the Making of the Musical Sensation of 1921 and All That Followed”と題されて、改作 (adaptation) 扱いになっていた。主演オードラ・マクドナルドのお陰で評価も高く、今回のトニー賞でも作品賞、脚本賞など10部門で候補になったが、結局一つも最優秀賞を獲得することはできなかった。2016年3月15日から38回のプレミア公演を経て、4月28日から本公演100回をこなして7月24日に千秋楽を迎えていた^[53]。

公開当初の多くの劇評では、オードラの演技が絶賛され、*The Wall Street Journal* では「2016年度上半期における“Shuffle Along”は、2015年度の“Hamilton”にも匹敵する」^[54]と激賞されたが、トニー賞で結果を出さなかったことが早期閉幕につながったのかもしれない。7月24日閉幕をもってオードラは産休に入ったと伝えられている。産休に入る前のオードラが、2016年トニー賞授賞式でも果たした重要な役目を最後に確認しておく。作品賞候補の一つだった“Shuffle Along”の紹介デモンストレーションでは当然、オードラが中心となっていた。歌も踊りもその迫力は圧巻であった。途中で録画された映像が流されたが、ブロードウェイをリムジンが走り回りながら、次々俳優たちを車に受け入れて、車の中でミニコンサートのように「レミゼラブル」の♪One Day More を歌う場面でのオードラの歌唱には魅了された。どの領域の歌も歌いこなせることを再確認できた。

さらにオードラは、ミュージカル最優秀主演女優賞の贈呈者 (presenter) の役目をした。受賞者は、「カラー・パープル」のシンシア・エリヴォ (Cynthia Erivo) だった。彼女に関しては、次節で論じるべきかもしれないが、ここでの説明に留めたい。1987年にナイジェリアで生まれたエリヴォは、イギリスに移民し教育を受け音楽の世界に入っていった。2011年にミュージカル「シスター・アクト」(映画邦題「天使にラブソングを」) で全英ツアーに出て、2013年ロンドン版の「カラー・パープル」でセリー役を獲得したのだった^[55]。

オードラからトニー賞を受け取った後のスピーチでは、イギリスでの活躍に力をくれた人々への謝辞がほとんどだった。これまでアカデミー賞でのハリー・ベリー (Halle Berry) や、トニー賞のオードラ・マクドナルドの受賞スピーチで、涙ながらに先達たちの名前を連呼したことを思い出し、その相違点に筆者は大変違和感を覚えた。アメリカ黒人女性ではないとはこういうことなのだと痛感した。

2年前、先達たちに敬意を表し謝辞を伝えたオードラは、これから産休に入り母親業を楽しむことだろう。2人目の実子、親として4人目の子ども誕生は、女優としての彼女の幅をさらに広げてくれることだろう。産後の復帰を待ちながらも、46歳で出産に臨むオードラに大きな拍手を贈りたい。

4.3 リバイバル「カラー・パープル」とヘザー・ヘッドリー

2016年7月から本学HPで、不定期ながら映画に関する連載を始めた筆者が、2作目に選んだのが、「カラー・パープル」だった。この紹介文でも、トニー賞授賞式にかなり言及したので、ここに拙稿^[56]をそのまま転載して、本節の導入に用いたい。

1985年に小説の映画化、さらに2005年にブロードウェイ・ミュージカル化、10年後の2015年にリバイバル上演されて、トニー賞最優秀リバイバル賞を受賞した作品、「カラー・パープル」をご紹介します。

今回は、アメリカ合衆国での芸術・文化をめぐる賞をいくつか説明しながら、映画紹介をしていきます。まず、ピューリッツァー賞について説明します。アメリカの新聞人ピューリッツァーの遺産によって1917年に制定された賞で、ジャーナリズム・文学・音楽の各部門でのすぐれた業績に対して、毎年授与されています。1982年にピューリッツァー賞を受賞した文学『カラー・パープル』は、黒人女性作家アリス・ウォーカーによって書かれました。

主人公セリーと、妹ネッティの書簡形式で書かれた小説です。20世紀前半の、南部ジョージア州の農村の黒人社会が舞台になっています。子どもの頃に生き別れになった姉妹の間で交わされる手紙を通して、最初は字を読むこともできなかったセリーが、女性として、人間として成長していく様子が描かれます。

黒人社会に限定した家族や縁者の関係が描かれて、男性から女性に日常的に行われた「暴力」(いわゆるDV)を告発するような内容にもなっています。この小説は、黒人社会の内部告発だとして、アリス・ウォーカーは批判を受けたこともありました。黒人社会において黒人女性たちが、ただ被害を受けたり、耐えたりするだけでなく、抑圧された状況の中でも強く立ち上がり、自ら成長していくことがテーマとなっていますので、人種や性別を超えた多くの読者に読まれていきました。

この反響が、ユダヤ人のスティーヴン・スピルバーグ監督に映画化を決意させたのでした。小説出版から3年目の1985年で、主役のセリー役を演じたのはウーピー・ゴールドバーグでした。映画「ゴースト」や「天使にラブソングを」で日本でも有名になったウーピーの、

ハリウッド映画デビュー作品は「カラー・パープル」でした。当時のほっそりやせた風貌のために、主役がウーピーだと気づくのに時間がかかるかもしれません。

映画「カラー・パープル」は、公開された1985年のアカデミー賞（この賞は、ハリウッド映画に与えられる賞なので、多くの人が知っていることでしょう）では、話題となり11部門の候補となりましたが、一つも最優秀賞を受賞できない無冠の映画となりました。11部門の中には、ウーピーの主演女優賞候補、二人の黒人女優の助演女優賞候補が含まれました。

助演女優賞候補の一人は、主人公セリーに、「男からの暴力を許すな！」と諭したソフィア役を演じたオプラ・ウインfreyでした。日本ではほとんど知られていないこの黒人女性は、アメリカ合衆国では超有名人で、知らない人はいません！今年で大統領最終年の8年目を迎えたバラク・オバマ大統領を、8年前に大統領に当選させた立役者は、オプラ・ウインfreyだと言われています。

2010年に『タイム』誌が選んだ「20世紀で影響を与えた人物4人」のうち、唯一の女性だったのが、オプラ・ウインfreyでした。このオプラが、「カラー・パープル」のミュージカル化を企画し、制作したのです。2005年のことです。

2006年2月にニューヨークへ出張した私は、このミュージカルを観る機会に恵まれました。写真はそのときに購入したプログラムです。ご覧下さい。2006年3月出版予定だった拙稿^[57]には、「付記」としてミュージカル「カラー・パープル」について報告しました。2010年に出版した拙著『語り継ぐ黒人女性：ミシェル・オバマからビヨンセまで』（pp.156-162）でも、「カラー・パープル」論を展開しました。

2005年にブロードウェイ・ミュージカルとなって以来、すでに10年が過ぎた2015年に再びブロードウェイに戻ってきました。つまり、リバイバル作品です。そこで、2016年6月に開催されたトニー賞授賞式で、最優秀リバイバル賞に選ばれたのです。では、このトニー賞について説明しておきます。ニューヨークのマンハッタン島の中心地となる劇場街（南北に長いブロードウェイ大通りの真ん中あたり、タイムズ・スクウェアを中心とする界限）で上演された作品（ミュージカルだけでなく演劇も）に授与される演劇賞のことです。演劇界の功労者アントワネット・ペリーという女性を顕彰して、彼女の愛称であった「トニー」に由来した命名でした。戦後2年目の1947年創設で、今年が第70回目となる賞です。

歴史的な政治家、アレクサンダー・ハミルトンを主人公として描いた、ヒップホップ音楽満載のミュージカル作品「ハミルトン」が、第70回のお話をほぼすべてさらったと言ってもよかったトニー賞授賞式でした。「カラー・パープル」については、最優秀リバイバル賞だけでなく、主人公セリー役をして、圧巻の歌唱力をみせた黒人女優シンシア・エリヴォ（アメリカ人ではありません）は、ミュージカル部門で最優秀主演女優賞を受賞しました。

授賞式途中で彼女が絶唱した歌♪I'm here は、映画においてもとても重要な場面で絶叫されます。DVが止まなかった夫を捨てて、自宅を出て再出発しようとするセリーが夫に向かってこう叫びます。「私は貧しくて、黒くて、そのうえ醜い。でも神様、私は生きている！私は生きている！（I'm here）」と。

アメリカ社会でも、アメリカ黒人社会においても、最下層に追いやられて厳しい状況に置かれてきた黒人女性は、その現状に屈服することなく、立ち上がる力を持つのです。「強く生まれたわけじゃない。強くならざるを得なかっただけ」というある黒人女性の言葉は、私が30年間黒人女性史研究者を続けてこられた原動力となりました。

誰も生まれながらにして強い人はいない、強い心を持って生きていくことで、自らの生きる (I'm here) ことを受け入れていく。そうしてみんな生きていくのだと、私は思います。来週、ニューヨーク出張予定ですが、ミュージカル「カラー・パープル」報告は、次回と致します。みなさま、どうかよい夏をお過ごし下さい！

すでに前節で言及したように、リバイバルされた「カラー・パープル」で主人公セリーを演じたのは、ナイジェリア系イギリス人のシンシア・エリヴォで、彼女はトニー賞主演女優賞を受賞した。その歌唱力は圧巻で、受賞も納得できる実力の持ち主であることは確認できた^[58]。ところが、その受賞スピーチには業界の先達たちへの謝辞は含まれなかった。前述した通りである。本節では、セリーに大きな影響を与えた「シュゲ」^[59]を演じたヘザー・ヘッドリー (Heather Headley) について論じたい。

2年前にオードラ・マクドナルドを出待ちしたように今回も、ヘザーの登場を長く待ち^[60]、小冊子にサインをもらうことができた。(写真1)「はじめに」で言及したが、2000年の拙稿ですでに、ヘザー・ヘッドリーについて以下のように論じた。

ブロードウェイ・ミュージカルでは、主役に何かあったときのために控えの役者 (stand-by) を置いている。「ダブル・キャスト」ではなく、「その他大勢」(Ensemble) をこなしながら「代役」(understudy) 待ちをする役とも違う「控え」だが、『ラグタイム』のオードラ・マクドナルドの「控え」がヘザー・ヘッドリーだった。

『ラグタイム』の「サラ」役「控え」の演技が、ディズニー企画の新しいミュージカル『アイダ』の制作スタッフの目にとまり、ヘザーはアイダ役を獲得するのだった。わずか25歳にしてブロードウェイでの大役、しかも新作のアイダ役に抜擢されたことに関してヘザーはこう語っている。「それは神様からの贈りもの (blessing) だった。20年間もニューヨークに住んで、ブロードウェイの舞台に立てる日を持つ人々のことを私は知っている」と。新作初演前のインタビューに答えた言葉だが、こう加えてもいる。「私はこの物語が大好き。アメリカが必要としていて、また私たち [黒人] も必要とする物語だと思う。文化的国境を越えて愛し合ったふたりの話だから」と。

2000年トニー賞最優秀主演女優賞を受賞した古代王国ヌビアの王女アイダの衣装で、公

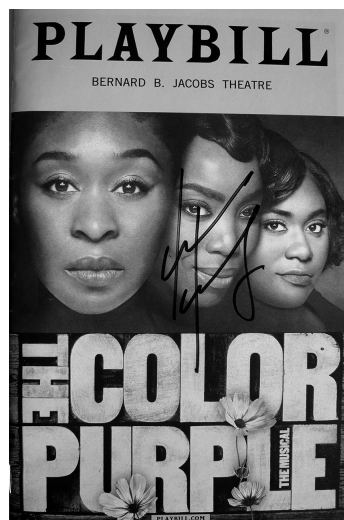


写真1

ヘザー・ヘッドリーのサインが書かれた「カラー・パープル」小冊子

演終了後観客総立ちとなったカーテンコールで見せた彼女の人懐こさも人柄をしのばせて微笑ましかった。筆者が『アイダ』を見た8月時点では、4月初舞台以来半年経っていなかったが、パレス劇場ではすでにブロードウェイの一大事のような大騒ぎであった。確実にヘザーの業績が積まれていくことを実感した舞台だった^[61]。

このアイダ役から16年、ヘザーは見事にシュゲ役を演じていた。劇場外の宣伝では、「トニー賞とグラミー賞受賞者ヘザー・ヘッドリーは、驚くほど感情的で多様な声の持ち主である」（写真2）との『ニューヨーク・タイムズ』の激賞が掲示されていた。確かに40代を迎えて、声の幅は広がり低音も魅力的になっていた。アイダで聞いた高音の記憶が鮮明だった筆者は、ヘザーの声の多様性を実感できた。

舞台から2列目の席だったので、女優たちの顔の表情などもつぶさに見ることができたが、ヘザーは何度も涙ぐんでいた。役柄なのか、個人的な感情なのかは計り知れないが、この夜はセリー役が代役（通常「教会の女性」役の Bre Jackson）だったため、彼女の熱演を喜んでいようにも見えた。

トリニダード・トバゴ生まれのヘザーは、1989年15歳の時、ヘザーの父親が教会牧師としての仕事に就くためにインディアナ州に移住した後、アメリカ国籍を得た。大学在学中にミュージカルについて学び、卒業を待たずに前述した『ラグタイム』の「控え」になることを選び、退学したのだった。ブロードウェイで活躍を続けながら、2012年にはロンドンのウェスト・エンドで『ボディーガード』のレイチェル・マロン役（映画ではホイットニー・ヒューストン）を好演して、オリヴィエ賞候補ともなった。

劇場外の掲示（写真2）の通り、グラミー賞歌手でもあり、2003年にはソウルアルバム賞、2010年にはR&Bゴスペル賞を受賞している。父親の関係で教会音楽に長く従事し、教会バンドや礼拝チームと共に定期的に音楽活動をする私生活が、そのまま仕事にもつながるのだろう。奴隷の子孫としてのアメリカ黒人ではないものの、その精神は生き続けているようである。ヘザーのさらなる活躍に期待したい。

5. 二人の友人による学術的貢献

5.1 バーバラ・フィールズ教授とアメリカ南部史学会会長演説

今年から丁度20年前の1996年は、全米黒人女性協会（National Association of Colored Women's Clubs ; NACW）が創設百周年を迎えた年で、創設地ワシントンD.C.において創設百周年大会が開催された。筆者も参加し、その参加記録を残した^[62]。

また渡米直前に東京で開催された研究会で、コロンビア大学教授のバーバラ・フィールズ博士（Barbara J. Fields, Ph.D.）と初めて会う機会を得て、NACW百周年大会に参加するこ

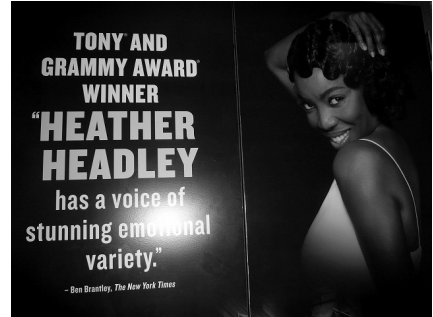


写真2
劇場外にあるヘザー・ヘッドリーの宣伝

と、参加後はニューヨークへ移動して史料収集をすることを伝えた。バーバラからは、彼女の祖母上がNACWサウス・カロライナ州支部長だったこと、ニューヨークで再会したい旨の提案を受け、1996年8月には再会できた。以来20年間、バーバラとは人種も国籍も超えた「姉妹」として友情を育み続けてきた^[63]。

2013年8月以降、毎年8月にはニューヨークでの史料収集を続けている筆者だが、毎回バーバラに会って互いの研究情報交換を続けてきた。今夏の渡米連絡へのバーバラからの返事には、面談快諾と共に、彼女の故郷であるワシントンD.C.での親族での集まり (reunion) について報告されていた。親族皆で、D.C.郊外のシーダー・ヒルにあるフレデリック・ダグラス・ホーム (Frederick Douglass National Historic Site) を訪問したこと、このホームが現在のように国立公園公益事業 (National Park Service) によって管理されるまでは、NACWが保存、管理にあっていたことが伝えられた。「ワシントンへ行くのなら、ぜひ訪問するように」とも添えられていた。

実はこのダグラス・ホームは、終戦50周年だった1995年8月にすでに筆者は訪問していた。この年はエノラ・ゲイ展示を見ることを目的の一つとしたワシントンD.C.訪問だったが、史料収集の合間に、他にも歴史遺産を訪問して、当時連載中のコラムに旅便りを残した^[64]。フレデリック・ダグラスに関しては、これまで拙著では繰り返し言及してきていた。この連載コラムでも「晩年のフレデリック・ダグラスと女たち：ダグラス没後100周年によせて」と題した拙稿^[65]を残していたので、2016年8月のバーバラとの面談時にはこの記事を見せて、すでにダグラス・ホームを訪問済みであることを直接話した。

今夏のバーバラとの話題の大半は、大統領選挙をめぐる話だった。訪問日 (8月17日) の *The New York Times* に彼女お気に入りの右派コラムニスト、ロス・ドゥザット (Ross Douthat) による論説^[66] が載っていたようで「あとでメールで記事を送るから読んでほしい」と薦められた。“The Pull of Racial Patronage” と題されたその論説では、トランプ候補支持層である大学教育を受けず現状に経済的不満を抱えている白人男性たちでは選挙戦を乗り越えられないこと、人種的利益供与が引き金になってこの大統領選挙戦が動いていくのか、と問いかけられていた。

『ニューヨーク・タイムズ』の記事と同時に添付されてきたのは、バーバラの会長演説であった。昨年8月、彼女は「大きな仕事を抱えて夏休みはどこへも行かずに自宅で仕事をする、裕子が来ても話す時間も十分でない」と嘆いていた。昨夏、彼女の仕事を十分理解しないまま、自宅を訪問して、結局いつも通り日曜の午後をたっぷり面談に費やして、愛犬ジロウのリバーサイドパークでの散歩まで付き合ってしまった。別れ際、何の仕事をしているのかと問いかけた私に「11月に予定されているアメリカ南部史学会の会長講演の原稿を書いている」と答えた。「私は今、会長なのよ」とも。

その会長演説は、学会誌 (*The Journal of Southern History*) に掲載されたが、彼女自身がその pdf を添付送信してくれたのだった。「2015年11月13日アーカンソー州リトルロックで開催された、第81回アメリカ南部史学会年次大会において行われたバーバラ・J・

フィールズ教授による会長演説」と脚注に説明が入った会長演説は、“Dysplacement and Southern History”^[67]と題されていた。

2015年出版の、航空パイロットのマーク・ヴァンホーナッカー (Mark Vanhoenacker) による著作 *Skyfaring: A Journey with a Pilot* からの引用で、パイロットには時差 (jet lag) はないけれど、場所のズレ (place lag) はある、という導入で会長演説は始まった。時間ではなく、場所での違和感という視点から、アメリカ南部という特殊な地域に言及するための導入であった。dys- [病気にかかった、困難、異常などの意] を冠したアメリカ南部の位置づけへの疑問を投げかけるため、ユードラ・ウェルティ (Eudora Welty)、マーク・トウェイン (Mark Twain) さらにウィリアム・フォークナー (William Faulkner) と言った南部作家たちの作品からの引用も重ね続けた。

筆者は個人的に聞かされていたが、バーバラの個人史 (サウス・カロライナ州チャールストン出身の父親は、ジム・クロウ社会の南部では学ぶ機会がないためワシントンD.C.に出て、そのままチャールストンへ帰らなかったこと、バーバラの出身地がD.C.である理由など) についても言及され、南部生まれの黒人知識人の状況も生々しく伝えられていた。

会長演説がなされる直前10月までの、2015年の『ニューヨーク・タイムズ』からの丹念な引用を繰り返しつつ、「20ドル紙幣のアンドリュー・ジャクソンが消えることに何の未練もない」といった時流最前線の情報に触れるかと思えば、アメリカ南部史の大家、ウッドワード (C. Vann Woodward) による著作からの引用も忘れず、格調高い会長演説に仕上げていた。

創設80年を超えるアメリカ南部史学会という伝統ある学会の会長を務めた、バーバラ・J・フィールズ教授が、人種も国籍も超えた「姉妹」であり、友人であることを誇りに思える、実に知的示唆に富んだ、刺激的な会長演説であった。

5.2 ジャネット・シムズ・ウッドとドロシー・ポーター・ウェズレイ

2004年から08年までの4年間、筆者は某企業月刊誌に連載寄稿したことがある。月刊誌から提示されたテーマに即してエッセイを書き続けた。2008年6月号ではテーマ「友」に基づいて、“I’m proud of you.”と題して、以下のような拙稿を書いた^[68]。

海の向こうの友を紹介したい。丁度1年前「文書館閲覧室という仕事場」と題して「私の好きな場所」を紹介した内容に対応する。NYの友は紹介するには多すぎるので、首都ワシントンに限定する。黒人大学ハワード大学の文書館、モーランド&スピングァン・センターの司書をしていた黒人女性ジャネットである。1989年に初めて訪れて以来「私の専門領域もアメリカ黒人女性史よ」と微笑んでくれたジャネットは、文書館の史料収集で私の水先案内人であり続けた。彼女のお陰で私は迷うことなく「近道」で史料にたどり着いた。午後5時閉館でまだ明るい夏時間では、D.C.内の書店巡りの案内役もしてくれた。

訪米連絡のためのFAXや電話程度の連絡しかししない私達だが、あるときジャネットが

“In case”（まさかのために）と前置きして私のアドレスを聞いたことがあった。それから数年後、ジャネットから初めてのメールが届いた。母上の介護のために退職すると。加えて「D.C.訪問時には必ず連絡して、会いに行くから」とも。彼女への返信にはこれまでの指導への感謝と同時に、介護退職という決断に対して“I’m proud of you.”と応援した。

ジャネットへの謝辞は、すでに1997年出版の処女作「あとがき」に長文で残した。その謝辞でジャネットのことをこう説明した。「すでに何冊も著作を発表し、95年には陸軍に從軍している黒人女性をテーマに博士号を取得したジャネットは、黒人女性の友人の中でも最も大切に尊敬しているひとりである」と。

ハワード大学のカタログカードの完璧な分類は、黒人女性史の専門家であるジャネットによっていた。「項目別、個人別となっている黒人女性史ファイル・カードを手にしたときの感激と落ち込みは忘れられない」とも書き残した。「落ち込み」とは、「4年以上かけて宝探しのように日本で入手した史料のすべて、否それ以上のものがひとつのファイルになっているのだ。私の4年間は何だったのかという落ち込みである」^[69]。

2000年8月に史料収集のためにハワード大学文書館を訪問したのが、ジャネットに会った最後となり、2008年に前述のようなメールを受け取ったのだった。2013年3月に13年ぶりにハワード大学文書館を訪れ、ジャネットの友人から彼女の私的メールアドレスを聞くことができた。今年2016年8月に3年半ぶりにワシントンD.C.で史料収集をすることになり、ジャネットに連絡したことで、16年ぶりの再会（reunion）を果たすことができた。

16年間の互いの研究成果を交換することで始まった再会で、私からは『語り継ぐ黒人女性：ミシェル・オバマからビヨンセまで』（2010年）と『物語 アメリカ黒人女性史（1619-2013）：絶望から希望へ』（2013年）を謹呈した。日本語で読めないものではあったが、前著は特に多くの写真を用いていたので、写真を手がかりに内容を説明した。ジャネットからも同様に著作を謹呈されたことは、大きな喜びと同時に驚きでもあった。大学司書職を母上の介護で退職した彼女が、研究を続け著作出版という成果をあげていたことは、筆者にとって大きな励みともなった。

2014年に出版されたジャネットの著作は、Janet Sims-Wood, *Dorothy Porter Wesley at Howard University: Building a Legacy of Black History*, Charlston: History Press, 2014. (写真3) である。滞在中に訪れたハワード大学購買部2階にある書籍部でも、出版2年後でも平積みされていて、学生たちに読まれていることがわかった。ドロシー・ポーター・ウェズレイ（Dorothy Porter Wesley：1905-1995）は、ハワード大学文書館モーランド&スピンガーン・センターで、膨大な史料処理にあたった研究司書であった。同センターにとって、ジャネットの著作の副題にあるよ

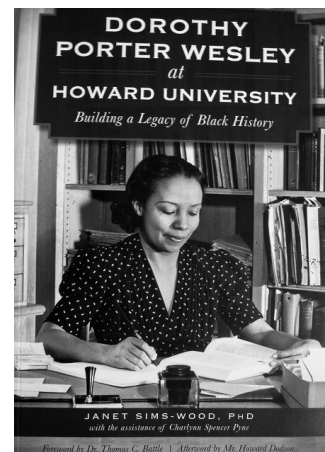


写真3 ジャネットの著作表紙

うにドロシーは「黒人史の伝説を作った」存在だったのである。

著名な黒人史家ベンジャミン・クォールズ (Benjamin Quarles) ^[70] は、ドロシーのことを1973年時点で「誇張ではなく、過去30年間に出版された主要な黒人史の著作において、ポーター女史に謝辞を書かなかった著作は1冊もない」^[71] と賛美していた。購買部の後に訪れたハワード大学文書館モーランド&スピングァーン・センターでの仕事を終えたあと、館内にある資料館の存在に気づいた。その資料館は Dorothy Porter Wesley Room と名付けられていて、ハワード大学に貢献した多くの重要人物の写真が展示されていた。

その1枚をここに紹介する。写真の説明は以下であった。「3人の著名なアメリカ黒人：W. E. B. DuBois, Mary McLeod Bethune, President Mordecai Wyatt Johnson (左から順に)」(写真4) で、真ん中で微笑むメアリ・マクロード・ベシューンに関しては、「国政に進出した黒人女性」の節題で、拙著で詳細に紹介した^[72]。ワシントンD.C.には、ベシューン博物館があるばかりか、国会図書館近くのリンカン・パークにはベシューンの立像^[73]があり、彼女の功績を讃えている。



写真4 「3人の著名なアメリカ黒人」

写真の左に立つデュボイス (W. E. B. DuBois) については、筆者の修士論文のテーマであったアイダ・B・ウェルズ (Ida B. Wells) の活動に大きく関わった男性活動家だったため、処女作はもちろんながら、『物語』でも随所で言及した。ワシントンD.C.のあとニューヨークへ移動したが、同地でデュボイスを演じる一人芝居“W. E. B. DuBois: A Man for All Times”を見る機会に恵まれた^[74]。

ドロシー・ポーター・ウェズレイ・ルームをあとにした筆者は、2日目の夜もジャネットと過ごすため、ホテルへ急ぎ戻った。16年ぶりの最初の夜は、夕食を共にしたが、2日目はジャネットが毎週水曜日に通っている教会牧師による聖書の勉強会に、参加させてもらった。迎えに来てくれたジャネットの車で、メリーランド州にある彼女の自宅近くの集会所へ出かけた。“righteousness”とは何なのか、ということテーマに90分近く牧師による説教を聴くことができた。つまり、“justice”とは何なのか、という問いかけであった。牧師の魅力的な説教はもちろんだが、その説教を聞く教会員たちの積極的な態度には圧倒された。

ジャネットは、ハワード大学文書館退職後も精力的に研究生活を続け、執筆成果を残していた。彼女が、現在研究対象としている黒人女性は二人いると聞かされた。児童書作家のエロイズ・グリーンフィールド (Eloise Greenfield : 1929-) と、メリーランド州上院議員のヴァーダ・ウェルカム (Verda Freeman Welcome : 1907-1990) だという。

後者は、ジャネットの地元であるメリーランド州が誇る黒人女性政治家だった。1958年に選出された黒人女性では最初の州上院議員で、1982年に現役引退するまで25年間、州政治に貢献した。人種差別と闘い、黒人の地位向上に努力していたが、そのことで1964年に

暗殺未遂にも遭遇した。その悲劇からも復帰し、現役政治家を続けたのだった。ちなみにウェルカム州上院議員は、1968、1972、1976年の3回の民主党全国党大会において、メリーランド州代表として参加した^[75]。本稿第3章で登場した4人の黒人女性に先駆ける「先達」だと言えるだろう。ジャネットによる研究書出版が待たれる黒人女性政治家である。

6. おわりに

2016年夏の日本では、豊洲市場移転問題関連で物議真最中の東京オリンピックが開催される2020年には、合衆国通貨20ドル紙幣にハリエット・タブマンが登場する。合衆国での女性参政権獲得100周年に、という意図ではあったが、100年前の1920年時点で選挙権を持ち得た黒人女性はほとんどいなかった。白人女性であれば皆獲得した参政権は、南部黒人には無縁であり続けた。

1954年のブラウン判決以降、1960年代に展開された公民権運動を経た半世紀後、2016年に開催された民主党全国大会は、3人の黒人女性によって仕切られ、一人の黒人女性ファーストレディの言葉によって、混沌としていた民主党員たちの気持ちは団結した。アメリカ黒人女性のこの半世紀の躍進は著しい。先達たちから続く黒人女性の底力が表面化したのである。

権利獲得運動は単に政治領域だけでなく、芸能界においても20世紀を通じて、権利獲得の闘争時代を過ごした。1990年代を画期として、映画、音楽、ミュージカル、演劇などアメリカ芸能界が変化し始めて、21世紀に至っている。特に「カラー・パープル」に関しては、アリス・ウォーカーの小説が発表された1982年以降、1985年のハリウッド映画化、その20年後のブロードウェイ・ミュージカル化、さらに10年後のロンドン・ウェストエンドからの凱旋によるリバイバル公演となり、2016年トニー賞授賞式で最優秀リバイバル賞を獲得した。「カラー・パープル」のテーマ「強い心を持ち自らを受け入れ肯定する (I'm here!)」というメッセージは、人種や国籍を超えて不滅だったことを示しているのだろう。30年以上のアメリカ黒人女性の思いが確実に受け継がれた好例である。

本稿で検討した黒人女性たちにとっては、2016年夏は一通過点ではあるだろうが、2016年夏が「画期」になることは間違いなさそうである。

註

- [1] 選挙日 (Election Day) は11月第一月曜日の次の火曜日と連邦法に定められ、休日になっている。4年に一度の大統領選挙の他、上院、下院、州知事などあらゆる選挙をこの日に行う。
- [2] 印刷所へ入稿前に大統領選挙の結果が出たので、ここに付記する。アメリカ合衆国初の女性大統領誕生は果たせなかった。ドイツでは長くメルケル首相、BREXITという新語を生み出した英国でもメイ新首相、物議を醸している韓国大統領は問題だが、世界では行政の長に女性が就いている。日本では絶望的だが、合衆国ではいつ女性の元首が誕生するのだろうか。拙著『物語 アメリカ黒人女性史 (1619-2013) : 絶望から希望へ』(明石書店、2013年: 以下『物語』と略記)の結語

とした、ミシェル夫人の「第二章」に期待するしかない。民主党大会を締めくくった3人の黒人女性が、どれほど絶望感を味わったか、想像するに余りある。今回の選挙直前の1か月近く、選挙人の票読みをメールで時々刻々と筆者に伝えてくれた友人、Melvin Edelstein からの「総括」とも言えるメールの一部をここで引用しておく。

件名：Hillary won, but Trump was right: the system is rigged!

本文：It is likely that when all the votes are counted Hillary won the popular vote. If so, this will be the 6th time in 7 elections that the Democrats won the popular vote, but In 2 times, Gore and Hillary lost due to the archaic 18th-century Electoral College. It was designed to block democracy-the people. The vote count is incomplete. For 507 electoral votes, Hillary has 59,760,117 votes (47.7%) and Trump has 59,547,218 (47.5%). However, when the full vote count is counted-New Hampshire, Arizona, Michigan are missing-he may win the popular vote.

- [3] 拙稿「ブロードウェイを飾る黒人女性：20世紀最後のミュージカルのヒロインたち」『浦和論叢』2000年12月、第25号、pp.57-83.；拙稿「アメリカ演劇における黒人女優：マヤ・アンジェロウ、ルビー・ディーからオードラ・マクドナルドへ」『浦和論叢』2015年2月、第52号、pp.1-29.
- [4] 拙著『語り継ぐ黒人女性：ミシェル・オバマからビヨンセまで』（メタ・ブレン、2010年：以下『語り継ぐ』と略記）；拙著『物語』；浦和大学HP 拙稿「ミシェル・オバマ初来日について」<https://www.urawa.ac.jp/news/23712.html>
- [5] “Black women take over top spots for Democratic Convention” *USA Today*, July 26, 2016.
- [6] 世界で「\$ドル」と称する貨幣を使用しているのは、本家本元のアメリカ合衆国以外では、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、香港である。
- [7] 独立200周年だった1976年に発行されたが、現在ほとんど流通していない。日本での2000円札のようなものである。
- [8] 詳細は下記拙稿を参照されたい。「紙幣と硬貨に見る大統領」『スクリーンに投影されるアメリカ：「9月11日」以降のアメリカを考える』（メタ・ブレン、2003年、以下『投影』と略記） pp.19-21.
- [9] 詳細は下記拙稿を参照されたい。「マンハッタン歴史散歩：アメリカ自然史博物館で太古の地球を夢見る」『投影』 p.214.；サカガウィーアに関して、以下の拙稿も参照されたい。映画『ナイト・ミュージアム』制作以前に書いたものである。「サカガウィーア (Sacagawea: 1789?-1884)：領土膨張の案内役をした先住民女性」共著『アメリカ・フェミニズムのパイオニアたち：植民地時代から1920年代まで』（彩流社、2001年） pp.58-63.
- [10] 「新20ドルに黒人女性／米紙幣120年ぶりに女性起用」『朝日新聞』2016年4月21日；‘More over Andrew Jackson, Harriet Tubman to be new face of \$20 bill’ *Asahi Weekly*, May 8, 2016.
- [11] Sam Wineburg and Chauncey Monte-Sano, “Who is a Famous American? Charting Historical Memory across the Generation,” *Phi Delta Kappan* 89, no.9 (May 2008) : 643-48 quoted in Lois E. Horton, *Harriet Tubman and the Fight for Freedom: A Brief History with Documents*, The Bedford Series in History and Culture, 2013, Boston, MA, p. v.
- [12] ハリエット・タブマンに関する拙稿は以下の3種である。① [シリーズ黒人女性その1] 「奴隷制度と闘った女達」1992年4月、*JEIG Report* NO.6、日本グローバル協会② 「ハリエット・タブマン (Harriet Tubman:1821-1913)：「女モーセ」と呼ばれた奴隷逃亡「地下鉄道」の指導者」共著『アメリカ・フェミニズムのパイオニアたち：植民地時代から1920年代まで』（彩流社、2001年） pp.141-145. ③ 「ハリエット・タブマンという逃亡奴隷」「総司令官」と呼ばれるようになるまで」「タブマンへの賛辞と後世の評価」拙著『物語』 pp.74-78.

- [13] "\$20 Billing: Tubman Is In, Jackson Is Out" *The New York Times*, April 21, 2016.
- [14] Lois E. Horton, *Harriet Tubman and the Fight for Freedom: A Brief History with Documents*, The Bedford Series in History and Culture, 2013, Boston, MA.
- [15] "Harriet Tubman on the \$20 bill: What that says about America" *The Christian Science Monitor*, April 20, 2016.
- [16] 日本で翻訳出版された子ども用絵本で、ハリエット・タブマンを紹介したものには以下がある。キャロル・ボストン・ウェザーフォード（さくまゆみこ訳）『ハリエットの道』（日本基督教団出版局、2014年、原題：MOSES: When Harriet Tubman Led Her People to Freedom）
- [17] "Women On 20s" HPからの情報である。https://www.women20s.org/candidates
最終候補4人に至るまでの候補には以下の12人もいた。簡単な説明を加えて列挙しておく。
- 1) Alice Paul : 1885-1977 女性参政権運動家
 - 2) Betty Friedan : 1921-2006 ウーマン・リブの契機書 (*Feminine Mystique*) の著者
 - 3) Shirley Chisholm : 1924-2005 黒人女性政治家 (『物語』 pp.248-252)
 - 4) Sojourner Truth : c.1797-1883 黒人女性活動家 (『物語』 pp.40-45)
 - 5) Rachel Carson : 1907-1964 『沈黙の春』の著者
 - 6) Barbara Jordan : 1936-1996 黒人女性政治家 (『物語』 pp.252-256)
 - 7) Margaret Sanger : 1879-1966 産児制限運動家
 - 8) Patsy Mink : 1927-2002 有色人種 (アジア系アメリカ人) で最初の連邦下院議員
 - 9) Clara Barton : 1821-1912 アメリカ赤十字の創設者
 - 10) Frances Perkins : 1880-1965 女性で最初の内閣閣僚 (FDR政権)
 - 11) Susan B. Anthony : 1820-1906 女性参政権運動家 (1ドル記念硬貨の図柄。cf.本稿2.1)
 - 12) Elizabeth Cady Stanton : 1815-1902 女性参政権運動家
- [18] 筆者撮影写真「Harriet Tubman Memorial タブマンの立像 ハーレムの通り名になった場所に建つ記念碑」『物語』 p.74.
- [19] "HARRIET TUBMAN COLLECTION UNVEILED BY NATIONAL MUSEUM OF AFRICAN AMERICAN HISTORY AND CULTURE." *States News Service* 10 Mar. 2010. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016. ; Eversley, Melanie. "Harriet Tubman changed history with bravery." *USA Today* 11 Apr. 2011 : 15. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016. ; "Md. state park to honor Harriet Tubman." *UPI News Track* 17 Aug. 2011. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016. ; "CARDIN UNDERSCORES IMPORTANCE OF BLACK HISTORY MONTH IN TRIBUTES TO HARRIET ROSS TUBMAN'S LEGAC." *States News Service* 11 Feb. 2015. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016. ; "VAN HOLLEN ANNOUNCES LEGISLATION TO BRING HARRIET TUBMAN STATUE TO THE U.S. CAPITOL BUILDING." *States News Service* 10 Mar. 2016. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- [20] Chan, Sewell. "About those words ..." *New York Times* 28 Aug. 2008 : A24 (L). Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016. ; "CONGRESSWOMAN LEE RELEASES STATEMENT ON PLAN TO HONOR HARRIET TUBMAN ON THE NEW \$20 BILL." *States News Service* 20 Apr. 2016. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- [21] "Black women take over top spots for Democratic Convention" *USA Today*, July 26, 2016.
- [22] 「アメリカ民主党大会は波乱の開幕：党幹部が辞任、サンダース支持者がヒラリー批判」『ニューズウィーク日本版』2016年7月26日10時53分
- [23] 同書

- [24] 「米民主党大会揺るがす『反サンダース』メール」 *The Wall Street Journal*, 2016年7月26日10時26分（日本時間）
- [25] 同書
- [26] https://en.wikipedia.org/wiki/Marcia_Fudge (final access, Sep.9, 2016)；国会議員としての公式HPは以下である。<https://fudge.house.gov/>；Marcia Fudge Demands Respect and ‘Respects Everyone Back’, ProQuest document link (July 26, 2016)；Congresswoman Marcia L. Fudge Statement on \$15 Minimum Wage, ProQuest document link (May 26, 2016)；Congresswoman Fudge Appointed Ranking Member of the House Subcommittee on Early Childhood, Elementary and Secondary Education Other Committee Assignments Announced, ProQuest document link (Jan. 28, 2015)；“Marcia L. Fudge” *Who’s Who Among African Americans*, Detroit: Gale, 2016. *Biography in Context* Web. 18 Aug. 2016.；“Marcia L. Fudge” *Federal Directory*. Bethesda, MD: Carroll Publishing, 2011. *Biography in Context* Web. 18 Aug. 2016.；“Marcia L. Fudge” *Contemporary Black Biography*, vol.76. Detroit: Gale, 2009. *Biography in Context* Web. 18 Aug. 2016.
- [27] DNC: DNC Chair Wasserman Schultz Announces Leah Daughtry CEO of Democratic National Convention Committee, ProQuest document link (April 2, 2015)；“Remarks Prepared for Delivery The Reverend Leah D. Daughtry, CEO Democratic National Convention Committee.” *PR Newswire* 25 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.；“Democratic National Convention Committee to Convene Midwest Democratic Platform Meeting.” *PR Newswire* 21 June 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.；“Democratic convention, 50,000 guests, 100 days away.” *Philadelphia Inquirer* [Philadelphia, PA] 17 Apr. 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016；
- [28] https://en.wikipedia.org/wiki/Leah_D._Daughtry (final access, Sep.9, 2016)
- [29] “Interview with Melissa Harris-Perry, July 25, 2016” *ELLE*
- [30] 拙稿「最初の黒人女性国会議員」「大統領選挙出馬を果たしたシャーリー・チゾム」『物語』pp.248-252.
- [31] 拙稿「ミシシッピの最も怒れる女性 ファニー・ルー・ヘイマー」『物語』pp.207-209.
- [32] 今夏シオンバーグセンターの研究目的は、この3人に関する史料収集だった。1991年に初めて訪れたときに使ったカタログカードもなくなり、すべてデータはコンピュータ検索になった。史料の現物にさわりコピーを依頼するという作業も、2011年頃から少なくなり、現在ではほとんどがメール送信、USBへの保存に変わってしまった。帰国後、持ち帰った史料をプリントアウトしてみると、紙の厚さが9センチにもなってしまった。その史料の山に囲まれながら、こうして原稿を書いている。
- [33] Donna Brazile, *Cooking with Grease: Stirring the Pots in American Politics*, NY: Simon & Schuster, 2004.
- [34] ここで引用した友人とは、シオンバーグセンターを定年退職した司書シャロン・ハワード (Sharon Howard) である。長年に渡って筆者の研究を助けてくれた。シャロンが2015年6月退職以降も毎年8月に会い、旧交を温めている。彼女からの情報は研究上貴重な参考資料である。シャロンは、かつて奴隷州の南部ケンタッキー州生まれで、南部料理に関する話を多く聞くことができた。
- [35] https://en.wikipedia.org/wiki/Donna_Brazile (final access, Sep.9, 2016)；“Donna Brazile.” *Contemporary Black Biography*. Vol. 70. Detroit: Gale, 2009. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.；“Donna L. Brazile.” *Who’s Who Among African Americans*. Detroit: Gale, 2016.

Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016. ; “Donna Brazile.” *Almanac of Famous People*. Gale, 2011. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016. ; Thompson, Krissah. “The legend of Donna Brazile: Why the DNC turned to an old pro in its time of need.” *Washington Post* 26 July 2016. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016. ; Borchers, Callum. “Donna Brazile’s comments on CNN make her a perfect fill-in for Debbie Wasserman Schultz.” *Washington Post* 25 July 2016. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.

- [36] 本節執筆は、以下のエピソードがきっかけとなった。本論文執筆を決めた直接の理由は、前節で検討した3人の黒人女性の活躍だった。今夏シヨンバーグセンターに到着してすぐ、1年ぶりに会った司書マイラ (Maira Liriano) への開口一番、この話をした。マイラから「ミシェル夫人のスピーチには言及しないの？素晴らしかったのに！」と言われ、自分自身の感激を原稿に残すことを決めたのだった。
- [37] 「大荒れの民主党大会で会場を鎮めたミシェルのスピーチ」『ニューズウィーク日本版』2016年7月27日15時30分；“First lady Michelle Obama’s full speech at the Democratic National Convention.” *UPI News Current* 26 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- [38] 首都ワシントン及びホワイトハウスに関して、筆者は以下の拙稿を書いてきた。「ワシントンDC：さまよえる首都物語の終結」『スクリーンで旅するアメリカ』（メタ・ブレン、1998年、2002年重版）pp.36-43.；「二つのホワイトハウス」『スクリーンに投影されるアメリカ』（メタ・ブレン、2003年）pp.12-16.
- [39] Davis, Julie Hirschfeld. “Fact-Checking Michelle Obama’s Critics: Slaves Did Help Build the White House.” *New York Times* 27 July 2016 : A19 (L). *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016. ; Borchers, Callum. “How the media covered Michelle Obama’s ‘house that was built by slaves’ line.” *Washington Post* 26 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016. ; Holley, Peter. “The ugly truth about the White House and its history of slavery.” *Washington Post* 26 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016. ; Jacobson, Louis. “MICHELLE OBAMA CORRECT THAT THE WHITE HOUSE WAS BUILT BY SLAVES.” *Tampa Bay Times* [St. Petersburg, FL] 25 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- [40] Philip, Abby, and Sean Sullivan. “Michelle Obama makes emotional case for Hillary Clinton.” *Washington Post* 25 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016. ; Cillizza, Chris. “Michelle Obama gave the best speech of the Democratic National Convention.” *Washington Post* 29 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016. ; “America will miss Michelle Obama.” *London Evening Standard* [London, England] 27 July 2016 : 39. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016. ; 拙稿「ファーストレディ、ミシェルの『第二章』」『物語』pp.286-288.
- [41] Overview – Lupita Nyong’o: Gale *Biography in Context*, Dec. 1, 2013 Updated: Oct. 02, 2015. ; *Who’s Who Among African Americans*, April 18, 2016. ; *Contemporary Black Biography*, vol.127. Detroit: Gale, 2015. *Biography in Context* Web. 18 Aug. 2016.
- [42] 映画『それでも夜は明ける』パンフレット、p.11.
- [43] https://en.wikipedia.org/wiki/Lupita_Nyong'o (final access, Sep.2, 2016)
- [44] https://en.wikipedia.org/wiki/Danai_Gurira (final access, Sep.2, 2016)
- [45] Review: In ‘Eclipsed,’ a Captive Lupita Nyong’o Is Captivating, *The New York Times*, March 7, 2016, on page C1 of the New York edition with the headline: In a Liberia Where Choices Are Never Easy
- [46] 主人公の本名はティ・チャラで、アフリカ奥地にある文明国ワガンダの王であり、部族に伝わる

王の称号として「ブラック・パンサー」と呼ばれている。2018年2月公開予定である。

- [47] “Lupita Nyong’o and Danai Gurira join ‘Black Panther’ ensemble.” *UPI News Current* 24 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.; “Eclipsed” で共演した監督で女優のダナイ・グリラもルピタと共に「ブラック・パンサー」に出演することがこの記事で明らかになった。ルピタはナキア (Nakia)、ダナイはオコエ (Okoye) という役名で登場することになるらしい。
- [48] 拙稿「アメリカ演劇における黒人女優：マヤ・アンジェロウ、ルビー・ディーからオードラ・マクドナルドへ」『浦和論叢』2015年2月、第52号、pp.1-29.
- [49] オードラは6月時点で妊娠していたとのことである。註34で言及した友人シャロンは今年“Shuffle Along”を観たそうで、その素晴らしさや裏話をたっぷり聞かせてくれた。別の仕事のために、“Shuffle Along”の役を3ヶ月休んで復帰したというので観に行ったそうだが、「大きなお腹で見事に踊って歌っていたわよ」と絶賛していた。前夫 Peter Donovan との間に生まれた娘 Zoe だけでなく、現在の夫 Will Swenson の連れ息子2人とも暮らしていることを2年前のトニー賞授賞式のスピーチで伝えていた。6月時点で Swenson との子を妊娠中だったらしい。以下のネット情報でも確認できた。https://en.wikipedia.org/wiki/Audra_McDonald
- [50] 「レビュー」『広辞苑（第六版）』岩波書店、2008年
- [51] https://en.wikipedia.org/wiki/Shuffle_Along (final access, Sep.9, 2016)
- [52] ジョゼフィン・ベイカーは、19歳で人種差別の祖国アメリカを出てパリに渡り、フランスで成功したアメリカ黒人女性である。第二の祖国フランスのために第二次世界大戦中レジスタンスにも参加したことで、国葬になった。筆者はこれまで以下の紹介文を書いてきた。「人種差別を拒否してフランスへ」拙著『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレーン、1999年）pp.62-71.; [シリーズ黒人女性その22]「巴里に愛されたジョゼフィン・ベイカー」2000年4月、*JEIG Report* NO.27、日本グローバル協会; 「パリに愛された女たち」『語り継ぐ』p.30.
- [53] https://en.wikipedia.org/wiki/Shuffle_Along_or_the_Making_of_the_Musical_Sensation_of_1921_and_All_That_Followed (final access, Sep.9, 2016); 筆者の到着前に幕を下ろしたので、見ることは叶わなかった。
- [54] *The Wall Street Journal*
- [55] https://en.wikipedia.org/wiki/Cynthia_Erivo (final access, Sep.9, 2016)
- [56] 浦和大学HP拙稿「映画『カラー・パープル』を観て、私の居場所を考えよう！」
https://www.urawa.ac.jp/news/29437.html; ちなみに1作目は『オデッセイ』を選び論じた。
- [57] 拙稿「黒人社会とドメスティック・バイオレンス：文学とブルースと映画を手がかりに」『立教アメリカン・スタディーズ』第28号、2006年3月、立教大学アメリカ研究所、pp.103-126. (「付記」pp.124-126.)
- [58] 今夏の出張は、ワシントンD.C.で3日過ごした後ニューヨークへ入った。移動初日の夜に「カラー・パープル」を観た。切符購入時に窓口の女性は「今日の主演女優はトニー賞受賞者じゃないけどいいの？」と念を押してきた。筆者の関心は主役ではなく、ヘザー・ヘッドリーだったので、当然ながらこの夜の切符を購入した。4.2で紹介した友人シャロンは「主演女優の歌唱力が素晴らしいのよ！」と絶賛していたが、筆者の食指は動かなかった。
- [59] 映画「カラー・パープル」を最初に論じた拙著『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレーン、1999年）では、この女性の名前を「シャグ」と表現した。映画の字幕やパンフレットに従ったためだった。原作で「砂糖（シュガー）のように甘い」と表現されたことを考慮して、「シユグ」とすべきであった。ミュージカルでは当然「シユグ」と発音されていた。; 2015年10月に「カラー・パープル」がリバイバルされた当初は、シユグ役はジェニファー・ハドソン (Jennifer Hudson)

だった。映画「ドリームガールズ」で最優秀助演女優賞を受賞した女優である。ハドソンの後任として、2016年5月10日以降、ヘザーがシユグ役を演じている。役の交代について、以下のような高い評価がなされた。“How to Keep a Musical Great: Call Heather Headley and Marin Mazzie” *The New York Times*, May 30, 2016. 「役の交代によって二度見ることで、二度恋に落ちることができる。感激した翌朝、幸せを感じてその夜も切符を買うために列に並ぶだろう」との書き出しで、「カラー・パープル」のヘザーへの交代と、「王様と私」の主演交代を合わせて紹介し、絶賛していた。

- [60] 舞台裏にヘザーが登場する前に、セリー役とソフィア役の女優が出てきた。前者はこの夜主人公の代役を演じたことを引け目に思っていたらしく、演技を褒めると涙を浮かべて喜んでた。後者には「映画のオペラを超えたわよ！」と賛辞を贈ると「何よりの褒め言葉で嬉しい！」と喜んだ。ヘザーには「2000年に貴女のアイデアを見たわ。今晚も同様に感動した」と賛辞を伝えた。オードラに比べると、ファンへのサービス精神は少なく、残念だった。
- [61] 拙稿「ブロードウェイを飾る黒人女性：20世紀最後のミュージカルのヒロインたち」pp.65-70. 今回ここに引用して思い出したことがある。1998年に筆者が『ラグタイム』を見たときのサラ役は「控え」女優だった。つまりヘザー・ヘッドリーをすでに観ていたのである；この拙稿後、2003年出版拙著『投影』の「ニューヨーク歴史散歩」でも、ミュージカル「アイデア」に言及できた。
- [62] 拙稿「全米黒人女性協会百周年記念大会参加報告記」『黒人研究』第66号、1996年12月、pp.25-28.
- [63] 拙著『語り継ぐ』p.179、脚注3.
- [64] 以下のコラム導入で旅便りを書いた。拙稿「シリーズ黒人女性その11」 「郵便切手になった女達」1995年10月、*JEIG Report* NO.16、日本グローバル協会；この理由は、エノラ・ゲイ展示会場、宇宙航空博物館内の本屋で、最初の黒人女性パイロット、ベシー・コールマン [シリーズ黒人女性その9で紹介済み] に関する研究書を購入したり、きのご雲論争の対象となった終戦記念切手シート購入で寄った郵便局で「黒人遺産」記念切手シリーズの最新作を入手したら、ベシー・コールマンだったりしたことだった。記念切手には1995年時点ではソジャナ・トルース、ハリエット・タブマン、アイダ・ウェルズ、メアリ・ベシェーンが対象となっていた。最新記念切手には南北戦争シリーズがあり、1シート20枚の内女性は4枚、黒人女性はタブマンだけだった。本稿第2章の主人公である。記念切手への筆者の関心はこの後も続き、以下のような拙稿も残した。Additional story 2-⑥「記念切手になった女たち」『語り継ぐ』p.185.ちなみにこのコラムの写真に使用した2009年発行の「公民権運動家シート」及び個人切手「アンナ・ジュリア・クーパー」をアメリカで購入して郵送してくれたのはバーバラ・フィールズ教授だった。
- [65] フレデリック・ダグラスに関しては、黒人研究会例会（1995年11月）で口頭発表する機会があり、発表内容を以下に残した。拙稿「黒人女性活動家たちと晩年のフレデリック・ダグラス：ダグラス没後百周年によせて」『黒人研究会 会報』第42号、1995年、pp.3-4；この研究発表後に、前述のコラム翌号で以下も残した。拙稿「シリーズ黒人女性その12」 「晩年のフレデリック・ダグラスと女たち：ダグラス没後100周年によせて」1996年6月、*JEIG Report* NO.17、日本グローバル協会、p.13；バーバラからの最初のメールに添付されていた記事 “The Frederick Douglass Home” *The Crisis* (Feb., 1917) pp.174-176.は、過去の拙稿のための史料の一つだった。
- [66] Ross Douthat, “The Pull of Racial Patronage”, *The New York Times*, Aug. 17, 2016.
- [67] Barbara J. Fields, “Dysplacement and Southern History”, *The Journal of Southern History*, vol. LXXXII, No.1, Feb., 2016, pp.7-26.
- [68] 三井不動産ワーカーズフォーラムMOC 2008年6月号；註 [3] 及び [61] で言及した拙稿「ブロードウェイを飾る黒人女性」は、2000年にハーワード大学モーランド・スピングアン・センター

で、ジャネットのもとで史料収集を行ったときに入手できた史料に基づく部分が多い。そのため、この拙稿にはジャネットへの謝辞を付記していた。

- [69] 拙著『アメリカ黒人女性の歴史：20世紀初頭に見る「ウーマニスト」への軌跡』（明石書店、1997年初版、2000年重版）pp.222-223.
- [70] 筆者は同氏の著作翻訳に関わったことがある。以下である。ベンジャミン・クオールズ（明石紀雄、岩本裕子、落合明子訳）『アメリカ黒人の歴史』（明石書店、1994年）
- [71] Janet Sims-Wood, *Dorothy Porter Wesley at Howard University: Building a Legacy of Black History*, Charlston: History Press, 2014, p.123.
- [72] 拙著『物語』 pp.168-173.
- [73] 同書、カバー写真裏面（2000年撮影、2013年訪問時にはリンカン・パークは工事中でよい写真を撮ることができなかったため）
- [74] 「偉大な公民権運動家の人生とその時代」と副題された芝居は、ロワー・マンハッタン小さな劇場で40席ほどが満席となって公演された。筆者がこの一人芝居を知るきっかけは、シヨンバーグセンターに置いてあった小さな葉書だったが、この葉書には「歴史はデユボイスを無視できない」というキング牧師の言葉が紹介されていた。19世紀末から活動を開始して、現在まで存続する全国黒人地位向上協会（NAACP）の創設者の一人となり、ワシントン大行進が行われた1963年にはアフリカで見守り、かの地で亡くなった。この一人芝居では彼の人生の悲哀が語られ、この写真の知的な笑顔が晩年保てなかったような解釈だった。
- [75] ウェルカム州上院議員に関する情報はhttps://en.wikipedia.org/wiki/Verda_Welcome (final access, Sep.2, 2016)

SELECTED BIBLIOGRAPHY

2016年8月に行った、ニューヨーク公立図書館ハーレム分館ジョンバーグセンターでの史料収集の結果入手した史料の一部である。本稿の対象とした黒人女性ごとの項目に分けた。入手した史料数を明記した上で、本稿で主に使用した史料に限定して表記した。

[第2章]

Harriet Tubman (38点入手中14点)

- ・ “Harriet Tubman.” *Contemporary Black Biography*. Vol. 9. Detroit: Gale, 1995. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Chan, Sewell. “About those words …” *New York Times* 28 Aug. 2008 : A24 (L). Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “HARRIET TUBMAN COLLECTION UNVEILED BY NATIONAL MUSEUM OF AFRICAN AMERICAN HISTORY AND CULTURE.” *States News Service* 10 Mar. 2010. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Eversley, Melanie. “Harriet Tubman changed history with bravery.” *USA Today* 11 Apr. 2011 : 15. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “Md. state park to honor Harriet Tubman.” *UPI News Track* 17 Aug. 2011. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “CARDIN UNDERSCORES IMPORTANCE OF BLACK HISTORY MONTH IN TRIBUTES TO HARRIET ROSS TUBMAN’S LEGAC.” *States News Service* 11 Feb. 2015. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “VAN HOLLEN ANNOUNCES LEGISLATION TO BRING HARRIET TUBMAN STATUE TO THE U.S. CAPITOL BUILDING.” *States News Service* 10 Mar. 2016. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “CONGRESSWOMAN LEE RELEASES STATEMENT ON PLAN TO HONOR HARRIET TUBMAN ON THE NEW \$20 BILL.” *States News Service* 20 Apr. 2016. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Schouten, Lucy. “Harriet Tubman on the \$20 bill: What that says about America.” *Christian Science Monitor* 20 Apr. 2016. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Calmes, Jackie. “\$20 Billing: Tubman Is In, Jackson Is Out.” *New York Times* 21 Apr. 2016 : A1 (L). Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Korte, Gregory. “Harriet Tubman: Face of new \$20.” *USA Today* 21 Apr. 2016 : 08A. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Calmes, Jackie. “\$20 Billing: Tubman Is In, Jackson Is Out.” *New York Times* 21 Apr. 2016 : A1 (L). Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Calmes, Jackie. “Tubman’s \$20 Should Beat a Future Cashless Society.” *New York*

Times 23 Apr. 2016 : A11 (L). Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.

- Lewin, Tamar. "This Is Harriet Tubman. Accept No Substitutes on the \$20 Bill." *New York Times* 5 May 2016 : A12 (L). Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.

[第3章]

Donna Brazile (15点入手中5点)

- "Donna Brazile." *Contemporary Black Biography*. Vol. 70. Detroit: Gale, 2009. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- "Donna L. Brazile." *Who's Who Among African Americans*. Detroit: Gale, 2016. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- "Donna Brazile." *Almanac of Famous People*. Gale, 2011. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- Thompson, Krissah. "The legend of Donna Brazile: Why the DNC turned to an old pro in its time of need." *Washington Post* 26 July 2016. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.
- Borchers, Callum. "Donna Brazile's comments on CNN make her a perfect fill-in for Debbie Wasserman Schultz." *Washington Post* 25 July 2016. Biography in Context. Web. 18 Aug. 2016.

Marcia Fudge (12点入手中6点)

- Marcia Fudge Demands Respect and 'Respects Everyone Back', ProQuest document link (July 26, 2016)
- Congresswoman Marcia L. Fudge Statement on \$15 Minimum Wage, ProQuest document link (May 26, 2016)
- Congresswoman Fudge Appointed Ranking Member of the House Subcommittee on Early Childhood, Elementary and Secondary Education Other Committee Assignments Announced, ProQuest document link (Jan. 28, 2015)
- "Marcia L. Fudge" *Who's Who Among African Americans*, Detroit: Gale, 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- "Marcia L. Fudge" *Federal Directory*. Bethesda, MD: Carroll Publishing, 2011. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- "Marcia L. Fudge" *Contemporary Black Biography*, vol.76. Detroit: Gale, 2009. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.

Leah D. Daughtry (6点入手中4点)

- DNC: DNC Chair Wasserman Schultz Announces Leah Daughtry CEO of Democratic National Convention Committee, ProQuest document link (April 2, 2015)
- "Remarks Prepared for Delivery The Reverend Leah D. Daughtry, CEO Democratic

National Convention Committee.” *PR Newswire* 25 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.

- ・ “Democratic National Convention Committee to Convene Midwest Democratic Platform Meeting.” *PR Newswire* 21 June 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “Democratic convention, 50,000 guests, 100 days away.” *Philadelphia Inquirer* [Philadelphia, PA] 17 Apr. 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.

Michele La Vaughn Robinson Obama (17点入手中9点)

- ・ “Michelle La Vaughn Robinson Obama.” *Who’s Who Among African Americans*. Detroit: Gale, 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “Michelle Obama.” *Gale Biography in Context*. Detroit: Gale, 2010. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Cillizza, Chris. “Michelle Obama gave the best speech of the Democratic National Convention.” *Washington Post* 29 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Davis, Julie Hirschfeld. “Fact-Checking Michelle Obama’s Critics: Slaves Did Help Build the White House.” *New York Times* 27 July 2016 : A19 (L). *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Borchers, Callum. “How the media covered Michelle Obama’s ‘house that was built by slaves’ line.” *Washington Post* 26 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Holley, Peter. “The ugly truth about the White House and its history of slavery.” *Washington Post* 26 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Jacobson, Louis. “MICHELLE OBAMA CORRECT THAT THE WHITE HOUSE WAS BUILT BY SLAVES.” *Tampa Bay Times* [St. Petersburg, FL] 25 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Philip, Abby, and Sean Sullivan. “Michelle Obama makes emotional case for Hillary Clinton.” *Washington Post* 25 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “America will miss Michelle Obama.” *London Evening Standard* [London, England] 27 July 2016 : 39. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.

[第4章]

Lupita Nyong’o (7点入手中4点)

- ・ Overview – Lupita Nyong’o *Gale Biography in Context*, Dec. 1, 2013 Updated: Oct. 02, 2015.
- ・ *Who’s Who Among African Americans*, April 18, 2016.
- ・ *Contemporary Black Biography*, vol.127. Detroit: Gale, 2015. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “Lupita Nyong’o and Danai Gurira join ‘Black Panther’ ensemble.” *UPI News Current*

24 July 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.

Audra McDonald (10点入手中3点)

- ・ “Audra McDonald.” *Contemporary Black Biography*. Vol.62. Detroit: Gale, 2007. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “Audra Ann McDonald.” *Who’s Who Among African Americans*. Detroit: Gale, 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “Audra McDonald.” *Contemporary Black Biography*. Vol.128. Detroit: Gale, 2015. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.

Heather Headley (8点入手中6点)

- ・ “Heather Headley.” *Who’s Who Among African Americans*. Detroit: Gale, 2016. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “Heather Headley.” *Newsmakers*. Vol.1. Detroit: Gale, 2010. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ “Heather Headley.” *Contemporary Musicians*. Vol.37. Detroit: Gale, 2002. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Paulson, Michael. “Back After a 15-Year Intermission.” *New York Times* 10 July 2016 : 5 (L). *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Brantley, Ben. “How to Keep a Musical Great: Call Heather Headley and Marin Mazzie.” *New York Times* 30 May 2016 : NA (L). *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.
- ・ Brantley, Ben. “Destiny and duty, Nile style.” *New York Times* 24 Mar. 2000 : E1. *Biography in Context*. Web. 18 Aug. 2016.

[第5章]

Barbara J. Fields, “Displacement and Southern History”, *The Journal of Southern History*, vol. LXXXII, No.1, Feb., 2016, pp.7-26.

Janet Sims-Wood, *Dorothy Porter Wesley at Howard University: Building a Legacy of Black History*, Charleston: History Press, 2014.

Summary

Some Aspects of the African American Women in Summer, 2016
— from Harriet Tubman to “The Color Purple” —

Hiroko Iwamoto

The aim of this paper is to consider some aspects of the African American women in summer, 2016. No woman is depicted on U.S. paper currency. It was announced on April 20, 2016 that the decision by the United States Treasury to place an African American woman, Harriet Tubman, escaped slave, on the nation's currency \$20. The 70th Tony Awards Ceremony was held on June 12. Many topics on African American actresses have happened. Lupita Nyong'o in the play, “Eclipsed” was noticed. Audra McDonald acted as a leading actress in the adaptation of “Shuffle Along”, “Shuffle Along, or, the Making of the Musical Sensation of 1921 and All That Followed”. In the musical, “The Color Purple”, which was given the best revival award, featured the supporting actress, Heather Headley. On July 25-28 the Democratic National Convention was held. Three African American women, Donna Brazile, Marcia Fudge and Leah D. Daughtry had very important roles at the Convention. The speech by Michele La Vaughn Robinson Obama was marvelous and fascinated the people. In the last chapter I'll discuss about my intimate friends, Prof. Barbara J. Fields and Janet Sims-Wood, Ph.D. through their speech and book.

Keywords African American woman, Democratic Convention, Broadway musicals

(2016年10月7日受領)